

東京女子高等師範學校
日本幼稚園協會

幼 兒 の 教 育

主 幹
倉 橋 惣 三

九月倍大號

茂木由子先生作歌
萩原英一先生作曲
土川五郎先生振付

四六倍判箱入装幀頗る美本
正價金二圓五十錢 送料十七錢

律動 をささなごのうた 遊戯

お 日 様
お 日 様
カ ケ ア ノ
カ ケ ク ラ
風 ケ ツ コ
次 目

茂木先生の歌に萩原先生の曲、遊戯界の第一人者たる土川先生の振付と、三先生の御盡力で今迄に無い理想的遊戯教本が出来ました、各々多数の寫真版を入れて表情の變化を理解し易く巧みに現して有ります。

發 兌

東京上野公園寛永寺坂下 上根岸八十八
振替東京四六一一―番 電下三〇四七番

教 文 書 院



日本幼稚園協會編輯幼兒教育

會長

東京女子高等師範學校校長

茨木清次郎

主幹

東京女子高等師範學校教授

倉橋惣三

贊助員 (五十音順)

帝國教育博物館長

棚橋源太郎

東京女子高師教授

岩谷秀雄

東洋大學教授

田子一氏

東京帝大醫科講師

醫博 乙竹岩雄

東京女子師範學校校長

高島平三郎

東京高師教授

文博 大瀨甚太郎

東京女子高師囃托

龍山義亮

慶應大學教授

醫博 唐澤光德

帝國教育會理事

土川五郎

東洋幼稚園長

醫博 岸邊福雄

京都帝大教授

野口援太郎

早蕨幼稚園長

久留島武彦

京師大學教授

乘杉嘉壽

帝國教育會會長

文博 澤柳政太郎

東京女子高師教授

野上俊夫

東京市學務課長

文博 佐々木吉三郎

東京女子高師教授

堀弘田長

東京高師附屬小學校主事

文博 佐々木秀一

東京帝大教授

松村武雄

東京女子高師教授

文博 下田次郎

東京帝大教授

松本亦太郎

東京女子高師教授

文藝士 菅原教造

奈良女子高師校長

榎山榮次

東京市視學長

醫文博 富士川游

奈良女高師附屬幼稚園主事

榎三田谷啓

東京女子高師講師

藤井利譽

東京高等學校校長

森川正雄

大阪市教育部長

福士末之助

東京帝大教授

湯原元一

東京女子高師講師

藤五代策

東京帝大教授

吉田熊次

東京女子高師講師

文博 谷本富

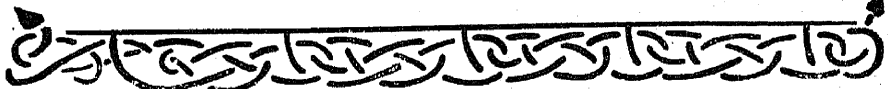
日本女子大學學監

安井哲子

文博 谷本富

日本女子大學學監

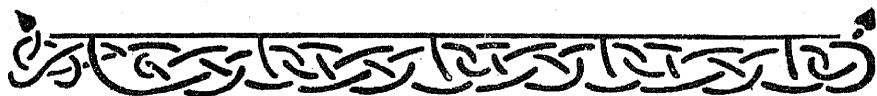
安井哲子





目 次

創造性と鑑賞性……………	倉橋惣三……………一三六
幼稚園細目(續)……………	馬場定一……………一四五
幼児保育の疑義……………	五味義武……………一五七
お月様……………	堀七藏……………一六五
露天保育……………	記者……………一七〇
小學校に於ける初年教育の標準……………	フレドリックビーボンサー……………一七五
外苑の雜草……………	みどり……………一九〇
長編小説 お春……………	岡田美津……………一九四



日本體育會體操學校講師
大阪府金蘭女學校講師
童謡新舞踊研究會主幹

久保富次郎先生著

菊判總クロース製箱入美本
舶來上質アートペーパー
圖解寫真六十餘圖挿入

各大家合作童謡新遊戯

正價金二圓十五錢
書留料十錢五

目次

みゝず汽車	夏	お月さん	とほせんぼ	虹の橋	お山の大将	月夜の鐘	鈴星	お守	子守唄
三澤 露風朝	三澤 露風朝	三澤 露風朝	三澤 露風朝	三澤 露風朝	三澤 露風朝	三澤 露風朝	三澤 露風朝	三澤 露風朝	三澤 露風朝
三澤 露風朝	三澤 露風朝	三澤 露風朝	三澤 露風朝	三澤 露風朝	三澤 露風朝	三澤 露風朝	三澤 露風朝	三澤 露風朝	三澤 露風朝
三澤 露風朝	三澤 露風朝	三澤 露風朝	三澤 露風朝	三澤 露風朝	三澤 露風朝	三澤 露風朝	三澤 露風朝	三澤 露風朝	三澤 露風朝

我國古來の舞踊と新來のダンスの長所を取入れ兒童に適應する様に創案した表情遊戯で學校教材として最も理想的のもの、殊に上品に優雅に謡の示す通り表現し無意味な手振、餘計な表情を入れず、曲の表現に對しては最も注意せる遊戯として無比の遊戯書であります。

發兌

東京上野公園寛永寺坂下 上根岸八八
振替東京四六一一 一番電下三〇四七番

敎文書院

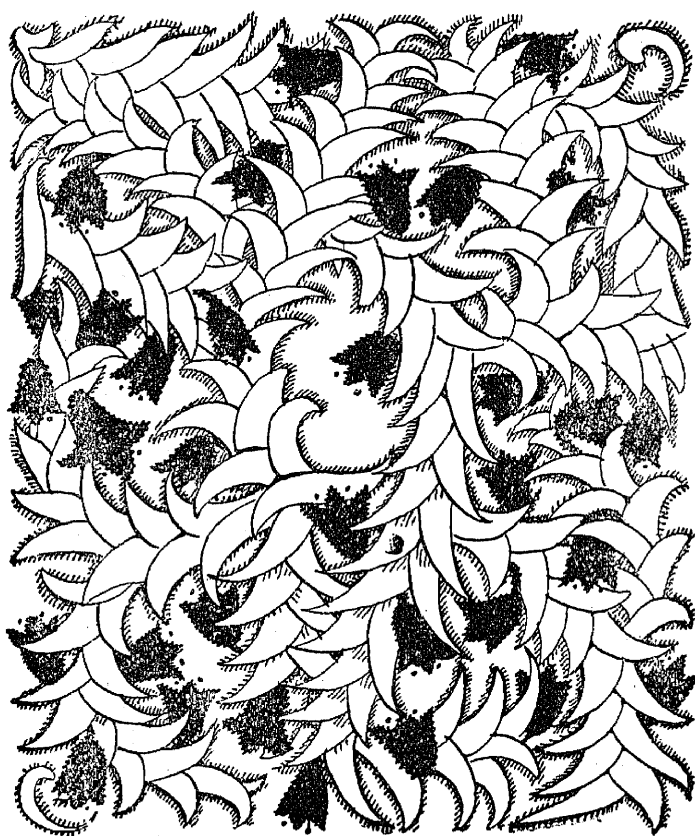
內校學範師等高子女京東

會協園稚幼本日

育教の兒幼

幹 主

三 惣 橋 倉



號 五 第 1924 卷 四 十 二 第

創造性と鑑賞性 (一)

倉橋 惣 三

晩近の教育問題の中で、創造と云ふことが大きな一つの問題になつて居ると云ふことは多く申上げる必要もないことであると思ひます。生活形式として自發と云ふことを主にしまして、そして或は自發主義或は自動主義と云ふやうな教育説が出て來ますのは、生活態度から見ますと云ふと、つまり一つの創造生活を營ませると云ふ所に價値をおいて居ると見ることが出來ます。心理學的に見れば自發とか自動とか云ふ言葉が出來て參りませうが、之を人格的或は人間生體の生活として考へて見れば、即ち創造と云ふことになつて來るのであります。其創造と云ふことは、二種の生活態度に對して反對のものとして考へられる。一つは所謂模倣的生活の反對として考へられますし、もう一つは習慣的生活或は慣習的生活の反對のものとして考へられる。模倣と云ふことが、何であるかと云ふことは、云ふまでもなく明かなことではありますが、習慣と云ふのは何であらう。色々の解釋が習慣と云ふことに試みられるのでありますが、全く機械的に習慣と云ふものを説明しますならば、繰返して居ると云ふことから出來て來る一つの型である。といはれる、ところで其繰返しから生ずる一つの型と云ふものは、習慣が出來て來る法則を見たものであつて、其意味に於ては、人間ばかりでなく他の生物にも勿論之れがありますし、又生物ばかりでなく時には無機物にさへも其同じ法則に依る現象と云ふものが考へられる。能く心理學の本に習慣と云ふものは靴にも附くし、帽子にも附くと云ふやうなことを云ふのはそれでありませう。併し其説明は

習慣が出来て来る法則を説明したものでありまして、人格的活動の態度として説いて居るのではない。私達は、人格的活動の態度として習慣が何であるかを見なければならぬ。それは模倣と云ふことに付ては、其説明をする場合に、人格的活動の態度としても物を見て居るからです。即ち或る手本となります所のものに對して、自分の人格が其儘惹き着けられて行く所の生活態度、即ち自分の方がものを率いて行く生活ぢやなくて、自分の方の生活が他のものに引張られて行く所の其生活態度を模倣と云つて居るのでありませう。すなはち、此意味に於て定義されて居ります模倣と云ふものは、模倣の出来て来る心理法則を説明して居るのではなく、模倣と云ふことをして居る時の人格活動の態度を示して居るのです。

すなはち、從來の心理學に於ては、何故模倣と云ふことが出来て来るかと云ふ其法則の説明はしませぬで、模倣するものとされるものとの人格的關係、其態度の關係を主として模倣と云ふことを考へて居る。模倣の一種と見て宜い所の暗示と云ふやうな問題に付きましては殊にさうであります。何故私が他の人に依つて暗示せられるかと云ふやうなことの其法則の説明は甚だ好く分らない其時に私の人格が人格活動が、暗示者の人格活動に追従して行く。さう云ふ時に之を模倣、或は暗示と名付ける、斯う云ふ風な云ひ方をして居ります。

そこで模倣に付いて考へた處の人格活動の態度に付いての説明を、習慣と云ふことに付いて試みることは出来ないかと云ふことが起つて来る譯であります。習慣は何故出来るかではなく、習慣に依つて生活して居る時の其人格活動の態度はどんなものであるか、それを見たのであります。

其時色々のことが考へられるのでありますが、先づ、習慣は一種の自己模倣であると云ふことが出来はしないかと思ふ普通に所謂模倣と云ふことは自己以外のものに對しまして、それに追従して行く態度であります。それに對して、習慣と云ふものは、前の瞬間或は過去に於ていたしました自分と云ふものの人格活動に對する模倣である。ところで若しさう云ふ解釋の仕方が餘り多くの間違ひがないとすれば習慣と模倣と云ふことは人格活動の態度としては要するに同じことであ

ります。只自分以外のものに其態度を示して居るが、自分自身に其態度を示して居るか、其違ひだけに歸着すると思ふのであります。

常に自分以外のものを模倣するに急なる者は、忙がしき者は、自分を模倣する暇がありませんからして、習慣を形作りませぬ。自分に模倣するに忙がしいもの、或は、其自己模倣の態度が易くなつて居る者は、或は既に其結果として一つの態度の型が出来て居る者は、他のものを模倣すると云ふことがなくなつて来る。問題は同じ模倣を外に向けるか、内に向けるかと云ふことであらうと思ひます。内に向けました模倣の場合に於ては、現在の活動して居る人格も、其手本となつて居る所のものも同じ自分でありますからして、此處に絶対に保守的な態度が起つて來ませう。昨日の我に倣つてする今日の生活は變化も進歩もないものでありませう。又明日も今日の我に倣つてする生活でありましたら、變化のないものでありませう。併しながら外に對して模倣して居る時には、外のものに對しては變化して居りませぬが、其當人に取つては其模倣するものの手本の違ひと同時に自分も變化して來るし、若し幸にして模倣して居る所の手本が進歩的な順序に並べられて居るものであるならば、それに連添ふて自分と云ふものも進歩して行く譯です。習慣の如く絶対に保守的なものではない。さう云ふことも云はれると思ふのであります。とにかく、絶対に保守性を持つて居ります所の習慣態度と云ふやうなものと違つたものであることは明らかなことであります。模倣の場合に於きましては、自分の中から作り出した創造ではないか知れませぬけれども、併も其手本の變化、殊にそれが進歩的な順序に置かれた場合に於ては、自分に取つては新しい生活へ移つて行くのである。それが本當の純粹の創造と云ふものあるかどうかは別問題として、兎に角習慣に比しましては進歩性を持つて居りますし、變化性を持つて居るし、外から見れば日に／＼新しい生活を創造して居るかの如く見られ得る餘地のあるものであります。

そこで考へなければならぬ問題としては、習慣の方は消えて仕舞つて、所謂普通の模倣と創造との關係を見れば宜いこ

とになる。さて、我々の總ての生活と云ふものは、材料、次に材料の結合、それから出来たものの表出と此三つの順序を取つて行くものでありますが、此中から模倣と云ふことに無關係な、言換れば其原因を自分以外のものに持つことなくして生活出来るものは材料の方ぢやなく、材料の結合の方であると云ふことは明らかであります、我々が心の中に持つてをります所の、或は知覺でありまして、觀念でありまして、或は概念となつて居る所のものであつても、兎に角是は自分が作り出すと云ふことの絕對に出来ないものであつて、外から取つて来たものであります、取つて来るには或る種の外界に追従ふ所の人格活動をしたことを示して居るのであります、材料の場合に於ては人格活動全體と云ふものに居らないで、人格活動の部分に關するものでありますからして、模倣と云はずして、此時は學習と云ふ言葉を使ひます、其材料を結合する仕方亦模倣に依つて結合することが出来る、併しながら、此結合の仕方だけには必ずしも模倣に依らない結合が出来るとも見られるのでありませう、勿論普通の場合に於きましては、自分では模倣した積りでなくとも、要するに何かに倣つて、其材料を結合して居るに過ぎないといふ様な場合があるのでありませう、併し或る特別な非常に創造性に富んだ所の人、或は私と雖もどうかして或る特別に創造的な生活態度になつて居る時には、是が従來の形と違つた結び方をするると云ふことは出来るものと見て置かなければなりません。

何かに依つて其材料の結合が自分獨特のものが出来る、是が所謂製作の心理、或は創造の心理の問題に觸れて來る譯で普通の心理學的な言葉を使ふとすれば、此處に想像と云ふ説明語が持つて來られます。但し、目的活動の思考の如きものと違つて居ると云ふ點は、思考生活と云ふものは絕對に一般法則に従つて居るものでありますが、想像だけは、其人の個性に依つて違ひ得るものである、其個性に依つて違ひ得る想像、それに依つて個性に應じた結合の仕方をしたと云ふ時に此創造と云ふものが出来るのでありませう、併し自分の個性に應じて、或るものが出来たと云ふことと、之を外に表出すると云ふことは、明らかに別の問題として考へなければなりません。表出の場合には二つの問題が起るのであります、が

一つは結合に依つて出来た所のものに當然に相應する所の表出と云ふものがある。A的の結合の仕方に対しては、當然にA的の表出の方法が相應するB式の結合の方法に對しては當然にB式の表出云ふものが、相應して来る、言換れば表出は、結合の結果に依つて出来たものの、其性質に依つて定つて来るのであつて、表出それ自身に獨立の變化性と云ふものはない、斯う云ふ風に考へることであります。是は極く極端な場合として論ずれば、相當に議論が出来ますが、極めて一般的な大體的な考へ方として、はさう云ふことも云ひ得る例へば童謡と云ふものが、我々の心の中に材料は同じ赤い夕日であり、或は山の御猿であり、或は一つ橋であり、落ちる木の葉であり、別に變つたものでありませぬが、或る結合の形式に對して童謡と云ふものが出来た時には、其童謡が持つて居る或るものに相應したるリズム、音律と云ふものが出来て来て、其内容から當然出て来た所の童謡の音律と云ふものが、考へられます、其場合は童謡は和歌の形式に依る表式には當然漏れないにしても、あの表出の仕方と云ふものに行く、尙ほ細かに云へば、其同じ趣意ことに音律と云ふものも、童謡の内容の所謂結合の仕方、色々の材料の仕方が變つて來れば變つて來るだけ、北原君は北原君形の式を取りませう、西條君は西條君の形式を取りませう、其意味に於ては表出する内容に相應する、ものであつて、別に獨自性を持つて居るものでないと云ふことが大體云へます。

所謂又別の方から考へて見ますと、表出と云ふものを其内容から切り離して、表出それ自身としての工夫とか、新しい形式とかと云ふやうなものを考へることも出来るし、それを作り出さうと試ることも有り得ることでありませう、それが何處まで内容と獨立に行はれるものであるかどうかと云ふことは色々議論があるやうであります、けれども實際に於て同じ内容を違つた形式に置換へて見やうと云ふ試みは出来ると思ひます、所謂表出の技術の問題として、技巧の問題として取扱はれた表出はさう云ふものであります、當然の表出として、新しい酒は新しき入れ物を要求すべき筈でありますけれども、時には古き革囊にも入れられると云ふ其表出が内容と離れた取扱をされるものであるとするならば、技巧としては

此處に又別な問題が出て来る。其技巧として、表出に付いて、表出それ自身として自由なことをなし得る時に、是がもう一度、其時に表出それ自身として或る模倣をすることもありませう、或は自己模倣をすることもありませう、或は此模倣を破つた新しい試みをしやうと云ふこともありませう、其内容と表出の關係の事實は此處で申上げやうと思つて居ないこととありますが、斯う云ふ御話をした所以は、所謂創造と云ふ生活の中に内容に關する創造と表出に關する創造と二つの方面がある、實際はそれが極めて密接な關係を持つて居て、切離せないものと思はれますが、テクニクとして片方を見る場合には二つに分けられるのであります。我々が子供の創造性を尊重しまして、其創造性に向つての教育をして居る時に、内容の方に對する創造性の教育をして居るか、表出の形式に關する創造性の教育をして居るか、兩方をして居るか、内容の創造を養ふことに依つて表出の創造を生出すやうにして居るか、書出の創造を教へることに依つて内容の創造を促して居るか、此二つの場合と云ふものが判然分けて考へなければならぬと思ふのであります。

一體創造と云ふものは模倣と云ふことの反對として考へらるべきものである、所が從來の教育と云ふものが、所謂學習本位でありまして、此處で云ふ學習と云ふことは教授法の原則としてこの學習と云ふ意味でなく、教育全體の可能性の考察に於ける學習と云ふ意味であります、其意味に於て所謂模倣と云ふことは教育の作用の可能性に於て全體として非常に大きな位地を占めて居つた、千何百年に近く我々の教育はさう云ふ考を以て支配されて居りました、之に對して其模倣或は自己模倣たる習慣を破つて、オリヂナリテイの力を認めて來たのが詰り今日の創造主義教育論であります、創造主義教育は兒童をして生出させる生活であると云ひますが、何處を指して生出すと云ふことで出来るか、勿論其人格の上の者に只盲目的に追従つて居ると云ふ生活ぢやないと云ふ消極的な特色は持つて居りますが、一般に進んで生出すと云ふそれは何處を見て云つて居るか、其問題を今申上げました五つのことに一々當嵌めて綿密に考へる必要があると私は思ふのであります、其五つのことに當嵌めて一々考へることは、亦若し御興味がありましたならば、諸君に御任せいたして置き

ます。

けれども、其考へ方の綿密でない爲に生出させると稱して、實は何物をも生出させて居ない創造と云ふものがあると云ふことだけを考へて見たいと思ひます。即ち模倣の習慣、それらの場合を破つて居ると云ふことが創造ではない、創造はそんな消極的な意義を以て定義されるものでありまして、そこは積極的に生出すと云ふ大きなものである、併しながら、若し型に従つてない、何物をも手本にして居ない云ふことだけを以て、此兒童のやつて居りますものを創造と見るならば是は甚だ不精密なものであると云ふことが云へると思ふ、創造は其結合する所に、或はそれに相當したる表出を取る所に或は獨立の表出するそれ自身としての新しき形を取る所に、其子供の個性に密接に關係して居るものがなければ、創造と云ふことは出来ないと思ひます、一般的論理思考と云ふものに依つてやつて行くのが、創造ぢやない、イマジネーションと云ふ心理上の言葉は極めて曖昧な言葉でありますが、其を論理思考に非ざる一つの考、働と云ふやうに見まして其イマジネーションに依つて或は結合が出来るとするならば、而してイマジネーションと論理思考の違ひは普遍性を持つて居る論理思考に對して、他は何處までも個性的なものであると云ふことに歸着する、とすれば、其結合が其子供の個性と云ふものと密接な關係を持つて居なくてはなりません、若し個性と無關係な偶然的結合、或は偶然的表出形式、さう云ふ風な偶然性と云ふものが非常に勝つて居るものでありますなら、模倣を破つて居ると云ふことに於ては、新しけなものであり新しけな生活であります、創造と云ふことの、本當の絶對性を持つて居るものぢやないと云ふことが出来ると思ひます。子供が畫きます所の自由畫と云ふものは、或は子供の歌ひ出します所の自由童謡と云ふものは、成る程一人／＼色々なものを作ります、併しながらそれが盡く模倣或は自己模倣を破つて居ることもあります、けれども悉く其個性と密接な關係を以て産出されて居ると云ふ風のものでない場合が澤山にあらうと思ひます、實に此偶然的な、謂はは思ひ附きと云つたやうな、さう云ふ場合に依つて出来て居るものが可成りあると思ふ、是は其模倣と云ふことを破つて居ると

云ふ點に於ては創造的な作品の生活に這入り得るものであらうと思ひますけれども、其子供が本當に個性に相當した新しいものを産み出して居ると云ふ意味に於ては、未だ本當の創造と言ふことは出来ないと思ふ。個性に相當せざる、而かも自己でも、所謂模倣でもない生活と云ふものを、精神薄弱なる者、或は精神病的なる者が可成り營むのであります。所謂人格的統一と云ふものが無くなつて仕舞つて、唯、離散したる、離れ離れの觀念や、知覺や、臆る氣な概念と云ふものゝ集合に過ぎないやうな精神衰弱者、或は白痴、或は精神病者と云ふやうな者に於ても、それが模倣でなし、習慣でもないと云ふやうな意味に於ての創造らしきものは可成り營まれるのであります、併しそれは言ふまでもなく創造ぢやない、何所が創造でないかと云へば、其子供に必然性的の關係を持つて居ないからである。一般に兒童と云ふものは或る意味に於ては精神の未だ甚だ薄弱なものであります、殊に人格統一と云ふやうなことに於て甚だ薄弱なものでありますからして、其する所が餘程人格必然の結合と云ふやうな意味に於ては微力な、薄弱なものであることを免れないと思ひます、而かも兒童全體のさう云ふ種類の生活の中に、個性に結び付けて居るやうなものと、全く其偶然の概念、觀念の、或は知覺の結びつきである、フワ／＼と浮き出るやうな、ものが可成り子供の中にあると思ふのであります。嚴密な意味に於てイマジネーションと云ふものゝ中に總てをオリヂナリティーに見て行くと云ふことは、非常に間違ひであり、又危険なものであると思ふのであります、此所で私は斯う云ふ風なことを、——可成り飛んで仕舞つた結論であります、——自分としては言つて見たい。創造教育と云ふことは模倣、或は自己模倣たる習慣を破つて、其支配を受けられない生活をさせることであると云ふことが創造教育の第一歩でありませう、——ものに囚はれて居る限り個性は發揮しないのでありますから、——それは勿論必要なことではありませうけれど、併しそれは創造教育の第一歩であつて、創造教育の極致は、個性に相應する所の創造へさせると云ふ所に、即ちイマジネーションを養ふと云ふことゝは違つた意味に於て、嚴格な創造教育としての目的がある、のである。ゲーテの作品は誰の型にも依らない、誰の作品の中にもない新しいものを出して居ると云ふこ

とに於て決して模倣でなし、又ゲーテ自身のあの澤山の作品が、常に第二番目の作品は第一番目の作品の型に囚はれ、第三番目の作品は第二番目の作品に囚はれるやうな自己模倣をしないと云ふ所に於ては、實に消極的な意味に於てはゲーテは創造をして居るのでありますが、ゲーテの作品の本當の創造……クリエーションの意義と云ふものは、どの作品もゲーテの個性と云ふものとしつかり組付いて居る、個性から個性を産み出し、母から我子を産み出して来る、母から母の子を産み出して来るのではない、是等の意味に於て産み出すと云ふことは、唯ほつかりと出て来たると云ふことではないと私は思ひます。斯う云ふ意味は近來の創造と云ふことを基本觀念として考へられます色々な教育、殊に創作的方面から見た藝術論の中には、唯、兒童をしてイマジネーションの生活をさせる所だけに止つて居るものが可成り多いと云ふことを、——或は間違ひかも知れませぬが、——私は思ふのであります、それでイマジネーションと云ふことは自由に働かすと云ふ意味に於ては、決してそれは無意味なものではありませんが、それだけでクリエーションの教育が出来るものであらうと考へたならば、是は考へ方が足りないと思ふのであります、さう云ふ意味に於て創造と云ふことを極く嚴密に解釋して其間違ひ易き、似て非なる想像と云ふものを斥けた譯であります、併し從來の教育が模倣と、自己模倣と、學習と云ふやうなことだけを基礎にしてやつて居つてもたのに對する創造教育論と云ふもの、殊にそれが技術の創作と云ふものを教育手段として用ひて、さうして創造性を養つて行くと云ふやうなことは非常に好い、——好いどころぢやない、結構なことと思ふのであります、結構なことではあります、併しもう一つ人間の人格活動の態度と云ふものに付て兒童生活を見て行く時に、唯創造と云ふ方面だけで止つて仕舞ふと云ふことは不十分であります。(續く)

幼稚園細目 (續き)

馬場 定 一

恩物

十數年以前には、幼稚園の實際は、恩物や、作業の材料

の使用に關する限りに於ては、既定のフレイベル法が、若しくは少くとも、當時幼稚園界の人々に由りて發表せられたるフレイベル法の解釋に従ふものである。此の頃には、現代の心理學の要求が、既に保姆の注意を惹き初めても居たし、又名のある心理學者は公然と當時の幼稚園法を攻撃したもので其の結果、漸時保姆は心理學や現代教育學の研究に更に一層注意深くなり、又自分等自身のやつて居る方法を新しき神の告の光に照して見る様に刺戟せられて來た。創意と勇氣とに富み且つ自分自身の實行はフレイベルの論理の根本原理即ち、子供の自己活動を破壊しつゝあるもの

である事を認むる様になつて居た、保姆達は漸次其の方法を變へ、幼稚園の恩物や作業の使用に於て新しく組織を更め初めたのである。

◎

當初世人の注意は、よく發達して居ない、手の補助筋を過勞しない爲及び眼の過勞を避ける爲に、幼稚園時代の子供にはもつと大きい材料を以て作業をさせる様な機會が與へられねばならぬと云ふ必要に惹かれて居た。此の關係から、恩物特にフレイベル作業は多くの教育者から激しく酷評せられた。

故に自然保姆は恩物に對して崇拜的の考を持たないで、唯單に目的を達する手段に過ぎないものとして居たので、初めには是等の材料を持つて遊んで居る子供等を研究し、

漸時試験的にもつと大きな材料を持たせる様に進歩して、この新しい出發が子供等に如何なる効果齎すかを認め初めた。保姆は第一恩物の一吋及び半吋の球、或は第二恩物の二吋の型は變化させる必要を認めなかつたが、積木には直ちに、一層大にしてもつと堅固なもの、價値を認めた。小さい第五恩物を持って居る子供を見ると、其の恩物は慥かに神經的精力及び手の發達しない筋肉の過勞だと云ふ事が解つた。保姆は以前には氣が付かなかつたけれども、是等の積木を組立てやうとして居る子供の顔は赤くなり、又或るものは、甚だしき神經的緊張が現はれて居る事を認められた。箸、扁豆等は、折角これを以て色々な形をこしらへても、すぐ形がくづれてしまふので、子供の心を苦める事が少くなかつた。保姆はもつと大きな材料を使へば屹度是等の困難を取り去り除いて、心理學者の要求に應ずる事が出来るのだといふ事が直ぐに解つて來たので、擴大せられた恩物の材料で其の經驗を始めたのである。それは八ヶ間敷くてとてもやりきれないだらうし、又子供等にも持つ事が出来ないかも知れぬといふ心配を抱いて警戒した人も

あつた、けれども是等の障害に對して大膽に、其の試みに出發し、そして六ヶ月以内に於て大きな材料の完全なる改造者になつてしまつた。保姆は豫告した通り、子供等が是等の材料を箱から取り出すのに大變に八ヶ間敷い事を認めたが、同時に小さい材料に較べると、拵へた形がめつたに轉覆しない程安定である事をも觀察した。又子供は其の積木を容易く且つ勝利者の心持で持つて居る事も直ぐ解つた。是等の積木の此の大きな箱は何か骨折甲斐のあるものであり、又子供等の生育上何か役に立つものやうであつた。小さい材料を使用して居た時にあつた過勞は今は無くなつて、子供等は此の新しき大なる材料の使用に由りて、より大なる且つより多く満足な、創造的仕事をする様に刺戟せられ、其仕事は唯に保姆により多くの満足と與へたのみならず、特に子供等に満足と與へた。

◎

恩物の大きさの變化は假令幾分フレーベル氏の材料の既定の用途から概して多少離れる様になるかも知れないが、直接其の使用法の變化には及がなかつたのである。爾後數

年間は現代教育學的考察に一層接近した手段に保母を導く様に感化が働いた。此の頃まで恩物の數學的方面の取扱は過度に力を入れられて來たのであつたが、多くの熱心なる保母は自ら次の如く向ふ様になつた。「此の貴重なる時間の浪費は何の爲だらう？」と、而して數、斷片的な部分及び幾何學的の形態等は恩物を以て教へる事が出來たので、四歳から六歳までの此の小さい人間に實際に教へられて居た。或は「それは遊んで居る内に教へたのだ」と云ふかも知れぬが、併し、随分強制的な、人工的な遊び方に退化した事であらう！ 子供がも少し發達して來ればもつとよく適し、もつと後になれば何れ丈か慥かに且つ楽しく安全に理解出來る様な數學的事實や考を、何の爲に此の可憐な小さい頭に注ぎ込んだのであらうか？ 哲學的洞察を以て深く浸み込まされて居る保母達は、其洞察に於て將來の價値を見、而して以前は慥かに無かつた所の現在の利益を洞察したのであつた。熱心なる保母は其の子供の幸福を求めんが爲に、かゝる手段に就いての子供の將來の事を感じ、かくして彼女は、是等の小さい子供等の頭を、萬一覺えて居

たにしても小學校に這入つてから直ぐに忘れてしまふ筈の數學的觀念を以て満す事になつたのである。彼女は最も進んだ小學校に於ても、數學は第一學年に於ては單に偶然の部分として課せられて居るのである事が解りかけて居た。「教育者も子供等がもつと後の年齢に達して其理解力が、もつと十分に發達して來てから、數學を教へる方が得策であらう」と云つて居る事も解りかけて居たのである。それならば何故幼稚園で恩物の數學的方面に力を入れねばならぬのか？

或る熱狂的な保母は、幼稚園は小學校の一年級の爲に準備して居るのでは無く、て、人生の爲に準備して居るのに何故小學校の一年級に於てする事を考へねばならぬのか？ と云ふかも知れぬが、若し幼稚園が小學校組織の一部分であるならば、保母は一年級の要求を考へないわけには行かぬ。兩者の關係は直接にして、生きたものたるべきであつて保母はその仕事をするに方つては心の中に小學校の要求を意識してかゝらなければならぬ。然らざれば幼稚園は小學校組織に於ては認められない事になるだらう。

又注意深かき保母は時の進むに従つて、自分の實行はフ
レーベル氏原理の重要な主義を打壊しつゝあるのだと云
ふ事が解る様になつた。恩物を數學的に使用するのに必要
な、夫れ程澤山な時間、注意深かく編まれたる豫定及び、
命ぜられたる仕事に對しての、夫れ程多くの時間は、恩物

の仕事にあてがはれた時間を、餘りに貪り過ぎて居る。其
結果として、子供は保母がもくろんだ目的の遂行の爲には
活動することがであるが、自己活動の發表、即ち内在せる
ものを外界に出す爲には、唯僅かの時間しか持つて居ない
と云ふ事になる。故に幼稚園に於ける子供等の眞に効果の
ある仕事は、恩物に關してにせよ作業に關してにせよ何れ
にした所で、毎週々々發表の爲の之等の手段に使用する時
間に比較すると實に瘠せ細つたものである。子供等は恐ら
く近所の建物で鋭角は發見する事が出来るだらう、けれど
も獨立的動作に關しての發達は全く減じられて居たのであ
る。故に保母は、所謂フレーベル法には従つて居たけれど
も、フレーベル氏の格言「子供はなす事に由りて習ふ」と
云ふ事に殆んど従つて居ないといふ事を非常に感じて來

た。茲に於て幼稚園の恩物及び作業に就いてはフレーベル
法に従ふ可きであるが、或はフレーベル原理の根底に横つ
て居る主義に従ふべきであるか、其の何れを取るかについ
て自分に反問させられる様になつた。

又保母は、かう云ふ方法で仕事をして行く事は、其の内
容の最も豊富にして子供の想像を最もよく刺戟させる所の
進歩したる恩物を持つて充分に仕事をさせ、又は遊ばせる
事から子供を切り取つてしまふものであるといふ事を發見
した。初期の恩物を以て小さい事柄に多くの時間を使用し
た爲に、年の終に方つて、子供等の効果ある活動に對して
かゝる立派な機會を提供する所の恩物を有意義に使用させ
る爲には僅かの時間しか残つて居ない。茲に於て保母は、
色々な外形を持つて居る幼稚園も、從來の自分の仕方は間
違つて居つたのであつて、自分の考のまゝに任せられて居
る子供等に「全自己の徹底的發達の爲の機會」を與へんが
爲には、其方法に根本的の改革をなす必要があるといふ事
を感ずるに至つた。

保姆は材料を以て論争する事をしなかつた。其材料には子供の創意的活動を起さしむべき立派な可能性の存在せる事を知つて居たから、幼稚園の積木以上に、子供の發達が日進月歩の時勢に應じ得るもつと適切な如何なる木片をも工夫する事は出来なかつた。保姆は其のやり方を變ずる爲に、總ての發達は生長の過程を貫して始めて其効果を致す事が出来るのだと云ふ事實を見失はない様にせねばならぬ事を認めた。又如何なる僥倖の方法も其の目的を達する上には、あてにならぬといふ事を認めた。他の言葉で云へば確實にして繼續的の發達が安全に得られねばならぬとすれば、「毎日の仕事は前日の仕事の上に築かなければならぬ」といふ事である。

其手段の改革をなすに方つて、自分を括る枷を全然投げ捨て、しまつて遂に自分の考へ通りに自由になる人の様に不注意には行はないで、寧ろ教育學の確實なる主義を信じ時と經驗が其の見識に附加へたる處に根據をおいて、注意深く改革を加へ、其最初の出發を改め之を正し終に稍次の如き案を基本とせる仕事を持つに至つたのである。

a 恩物を以てする總ての仕事を支配する所の根據は自己活動の根據たるべき事。

他の言葉で言へば、恩物を以て實行せらるゝ仕事は、命ぜられたものであつても乃至はさうでなくても、次の如き立場に由りて判断せられなければならぬ。即ち、「此の事は子供に於ける自己活動を發達させる爲に計畫された事か？」又は「子供等は眞に自己活動的であるか？」

b 其方法の目標は生産的の課業か又は創造的の課業に子供を導くべき事。

c 恩物を以てする總ての仕事の主なる注意は遊びに對する注意たるべき事、

幼稚園に於ける遊びは屢々普通の課業になつて仕舞ふもので子供等自身も權威が加へられ力が附加せられる事を課業と思つて居る。是は過程としては當然であるが、材料の使用が長引いて形式的な倦々する様なお稽古になつて來る場合には遊びの精神は殺されて仕舞つてほんとうの舊式な準小學校となるのである。

d 恩物を以ての遊びは次の三つの形式の一つを取る事

が出来る。

1. 絶対の自由遊び （經驗的 創造的）

2. 考へのみ指導せられたる自由遊び

3. 指導せられたる遊びと考

「絶対の自由遊び」といふ言葉の中に吾々は、經驗的及び創造的の二つの遊びの型を持つものである。最初に積木を彼等に渡してやると、彼等は其を以て試験する様に許される。其間保姆は「受動的になり且つ注意深く」見て居る。其後子供等が其の材料の管理及び支配を得るに至れば、彼等の仕事は初めの試みから考の能く定まつた創造的の企に進んで行く。簡單に云へば、吾々は子供等の内的生命の芽さしであるが故に價值があるのである。

考の指導せられたる遊び及び自由なる遊びは、子供が自分自身の考通り實行し得る様な仕事の方面に子供を保つものである。是は子供に或る定まつた方向の努力を続けさせる訓練となり、且つ初期の聯絡關係の無い離々の仕事から漸時に遠ざからしむるものである。此の方法の利益は後に

なつて明かに子供の絶対自由遊びに於て見らるゝ筈である。

私が特に此處に「絶対自由遊び」と云ふ言葉を用ふるのは、私の經驗で見ると大概の幼稚園では眞に自由の意味を持つて居ない遊びに「自由遊び」の言葉を用ひて居たからである。

考へ及び遊びの兩者共に保姆に管理せらるゝ指導遊びは、材料の可能的使用法を子供に暗示するといふ主なる目的を以て與へられるのである。數は附帶的に是等の遊びに入れる事が出来る。形態も比較的簡單な場合には子供等の注意を惹くに足るけれども、主要なる目的は、持つて居る材料によつて子供の自己活動を一層すゝめる事である。

指導の問題は、新しき經驗の獲得に於て使用さるゝ事を望む所の本能と衝動に對する適當なる刺激を選択する問題である。如何なる新しき經驗が望まじきか？ 即ち如何なる刺激が必要であるか？ と云ふ事は、其目的とする所の發達に就て相當の理解があるに非れば、云ひ換へると、子供に開かれたる可能なる其の生活を表はす事に大人の知識が引用せらるゝに非れば、之を云ふ事は出

來ない（デューウィー博士「子供と教課」りよ）

此の理由を以て指導遊びは規則として十五分以上を使用することはよくない。其残りの時間は、斯くして提供せられたる新しき考への適用の爲に子供の使用すべきものである。

f 拡大せられたる恩物の材料は幼稚園全過程を貫して使用せらるべき事。

g 大きい方の子供には其の時間の大部分を進んだ恩物を以て遊ぶ爲に提供してやる事、

恩物のフレイベル式使用が勢力を持つて居る多くの幼稚園に於ては、既に述べたるが如くに、内容の最も豊富にして従つて創造力をより多く刺戟し、且つ建設的使用に最も効果ある恩物を使用する爲には、子供等に僅かの時間しか與へられて居ない。初歩の恩物分解や形態を教へる爲に澤山の時間を使用する時は、進みたる恩物を知らせる爲に如何なる適當なる時間も與へる事は出来ない。

進みたる恩物とは特に第五及び第六恩物、三角形の板及び環を意味するものである。

保守的な保母の間に極普通に容れられて居て、稍廣く適用せられて居る或る細目では、構成的恩物の第一である所の第三恩物を第九週に出し箸を第十六週に出し、正方形の板は第十九週に出して第四の恩物は第二十八週まで出て來ない。而して第五、第六恩物は殆んど一つも出て居ない。十週間の間は子供等は殆んど獨占的に子供の自己活動の總ての刺戟の最も少い第一と第二恩物に保たれて居た。

此の細目は今は多少の改革が行はれて居るが、數年前に流行した方法をよく現はして居る。

ミス、ブローは、恩物を眞にフレイベル法に由つて使用し之を實現するには少くも四年間を要すと云つて居る。處が米國の幼稚園の課程は二年であつて、しかも多くの子供は唯一年若しくは一年の一部分しか這入ないから、自然此の事は、米國の必要に相應して、内容の豊富なる恩物を利用する事の出来る様に正規のフレイベル法を變化させる必要を論證するものである。

米國の子供は大概幼稚園に這入る前に二三の形の積木には親しんで居る。外國の子供は別であるが、第三恩物と數

も大きさも全然同じではないけれども、立體の木片に親しんで居ない子供は稀である。故に子供等は立體の木片はよく知つて居り、且つ大きい子供なら慥かに其の可能性をも幾分か諒解して居る。其れだのに何故幼稚園へ這入つてから後何週間も此の木片を使はせられねばならぬだらう？

第三恩物の養分的要素は極少い。是を以て何週間も其想像力が養はれて居る子供は飢えて居る小さい動物である。彼は扱ひ易き（幼稚園に於てのみ扱ひ易いのであるが）従順な小さい大人であつて、或る幼稚園に於ては毎日餘り大きく象どり過ぎて居る。此の過程は自己活動の意義を取消すものである。幼稚園に這入つて來る四歳乃至六歳の子供は活氣に満ち熱心にしてしかも能力あるものである。それだのに何故最初から、目的を達する爲には如何なる困難にも打ち勝たしむる所の自己活動を刺戟する様な材料を與へないで、其の力を働かせる上に何等價値の無い刺戟を與へない様な物で仕事をさせたり遊ばせたりするのだらう？

『父親が子供の通り路に丸太を轉がしておいても子供は「何ほ置いたつて僕等は幾らでも飛び越えて行ける」と叫

びながら容易く通つて行く。子供は第一回には難義をして其を乗り越えるのである。けれども此の事は自分自身の力で仕遂げた事である。そして力と勇氣とが生じて來て、歸つて來る時にも一度其障害物に打ち勝ち、間も無く容易く之を取り除ける事を覺えるのである（『人の教育』とフレイベルは云つて居るが、幼稚園の子供は全く之と同様である。恩物の使用にはこの暗示を心に持つてする事が必要である。

恩物の使用に就いての暗示。

新しき出發（今は最早新しくないが）の許に實行せらるべき仕事の詳細を書く事は此の章の範圍に於ては不可能であるが、其仕事の特質や目的の一部分を暗示する處の梗概を書く事は役に立つ事と思ふ。

第一恩物——能動的の遊、動き方と色の遊、即ち簡單なる方向（ころがること、上下すること等の如き）を表はす遊び、原色、色の種族。

小さい方の子供には單純なる能動的の遊びを始めに課せ

ば自然動作の遊びに導かれる。色の遊びは若しさせるならば保姆の指導に由るが好い。大きい方の子供には、先づ動作と色とに關する遊びをさせて、其方向と色とに就いてどんな智識を持つて居るかを決定し、かくして得たる要求に應じて後の遊びを授けるのである。此の恩物を以ての遊びはゲームの形を取る。

第二恩物——各の特徴を發見させる爲に三つの形を以ての實驗的遊び、與へられたる形態の名稱、是等の形の他の目的に關しての名稱（形の種族）廻轉の遊び、簡單なる機械的發明、團體遊。

小さい方の子供小さい方の子供には能動的遊びの爲に最初に球と立體とを與へ、次に是等の物體の特徴（球はころがり立體はじつとして居る）に注意する様に導く。次に續いて之等の特徴が特に強められる様なゲーム例へばナインピンズの如きものを行ふ。それから少し後になつてから同じ様な風にして圓柱を提示する。其の次に其形態を或る單純な構成的仕事か又は砂場などの遊びに子供等が利用するゲーム及び多分團體遊びも行はれる。形態の分解は教へ

ない、即ち面、角、稜等は表はさない。此の恩物は唯時々使用するのみである。

大きい方の子供には廻はず遊びがさせられ、後になつて壺釘を用ひたる箱を與へて、機械的發明の方面に其の熟練を試みらるべき機會が與へられる。

積木

第三恩物——子供によりての實驗、指導の遊、主に大人の作つた何かを説明する爲の物を模倣して作る形、子供の創造の仕事。

此の恩物は第一週に於て小さい方の子供等の實驗の爲に提供せられる。是から、指導遊びは前にも述べたる通り甚だ簡單なものである。子供等が熟練して來れば毎週全體の時間が自由遊びに與へられ、斯くして創造の仕事への路に出發させられるのである。

學期の終頃になつて子供等がまだ發見して居なかつたらば、恩物を或る中心の周圍に對稱的に排列する事が出来る事を知らしめる。若し大きい方の子供の中に幼稚園は初めて來たものが澤山に居れば、保姆は其の仕事や能力を觀

察しながら一度乃至二度、若し必要があればもつと度々此の恩物を以て自由遊びをさせる。若しそうで無くして、其の組の子供等が既に幼稚園に一學期も居たものである時は此の恩物の提示は省かれる。

第四恩物——實驗、此の材料の特色を表はすべき指導遊び——即ち三つの異つた面の種類、未だ子供が知らないならば平衡に關する法則の説明。家庭の道具に導かれる人形の道具の如き簡單なる構成的の形、團體遊び。

小さい方の子供には前の恩物が上手に持つ事が出来且つ使用する事が出来る様になれば直ぐ此の恩物が提示される。實驗が濟むと——是は一日の時間以上に多くの時間を——使用——第三恩物を子供等の前に置いて此の恩物との對照に注意する様に導く。それから前の積木で出来なかつた事柄で什麼事が出来るかを暗示する。尙又指導遊戲では、繰返して云ふ如く極僅かの時間丈使用して簡單なる暗示を與へる。是等に於ては其の目的とする所は、子供に新しい材料が如何なる可能性を提供するかを出來得る限り子供等自身に發見させる事であるから保姆は子供等に導かれる事

ある。かくして保姆は子供等が其の材料を上手に且つ樂に使用する事が出来る様になるまで少しづつ、其の知識を附け加へてやるのである。又共同の目的の爲に子供等と一緒に働かせる簡單な遊びも用ひられる。其れは例へば室の道具を慥へる如き個人的の働きに由るか乃至は大きな面を取り圍むが如き、砲臺を築くが如き等の共同の努力に由るか何れでも好いのである。

此の恩物は大きい方の子供には一般に第一週に與へられるのである。若し子供等が既に此の材料に十分に熟練して居る事が其の自由遊びで分れば、必要だと思はれる時に時々第四恩物の代りに第五恩物のもつと進んだ材料を提供する。その大多數が幼稚園に初めて來たものであるならば、小さい方の子供よりはもつと早く基礎を固めては行くが、此の恩物の使用にはも少し時間を與へる。

保姆は、如何なる材料を使用するにしても、指導のもとに爲し得る事で無くして、獨立で爲し得る事を以て子供の能力を計る事に注意しなければならぬ。子供等がする構成的形態、或る目的に其の材料を適用させるのに表はす熟練

幾分か材料の可能性と限界とを見る所の能力は保姆の手段を支配するものである。小さい方の小供も大きい方の子共も既に此の材料に親しんで來れば第三と第四とを合せて使用する。

第五恩物——實驗的遊び、新しい形の名稱、新しい形の發見に關する遊び、時々模倣に由る指導せられたる形態、考の指導せらるゝ自由遊び、少くとも一週一回の絶對自由遊び、團體遊び。

既に述べたる如く、大きい方の子供には、この材料を持運が出來、且つ有利に使用する事が出來る様になり次第、出來る丈早く提供してやるのである。最初には、一つの恩物を三人の子供に與へてやつて、一箱の中を三等分して、一人の子供が其の三分の一を受取る様にする。之が濟むと、子供等は此の新しい材料の經驗を得て、之を適當に組立てる事を覺えて來るのである。子供等は、他の材料と同じ様にこの材料を以て遊び、この材料に含まれて居る新しい形を發見する様な小さい遊嬉をこの時に與へるのである。是等のゲームは二つの大きい三角錐を以て始めて、出來る丈

色々の組合せを發見するのである。それから日が経つと、進んで二つの小さい三角錐で何が出來るか、次には三つを以て、次には四つ、と漸次進んで之を發見して行くのである。

新しい積木の名前は教へるけれども、出來上つた色々の形の幾何學的の名は教へない。若し何でも聞きたがる様な子供が其の名前を聞く時には教へても好いが、訓練的な仕方をしてはいけない、幾何學的の名稱を強いる様な事になつてはよくない。是等の遊びで子供等は相互に利益を受けるのである。かくして一人の子供が、他の子供に出來ない様な六かしい形を發見した時には、其の子供は全體に之を示して他の子供に模倣させる。此の種の遊びは非常に專心を要するから十五分以上もさせない様にして、後は直ぐ自由遊をさせるといふ。

此の新しい材料を樂に而もしつかりと使用する事が出來る様になれば之を全體として與へるのである。其の時は子供等は實に成功の喜びであつて、此の魅する様な澤山の材料を征服者の態度を以て受けとるのである。遂に子供等は、

力の生長を感じるが如き感じを得る様になり、この誘惑的な積木の使用法は幾らでも考へ出す事が出来て、實に其の盡きる所を知らぬ様である。此の材料の量の増す事と形の新しい事とは、大小の木片の現出の爲めに強められて、之等の將來ある子供等に一層好き仕事の領域を開くものである。第三恩物を以て遊ぶ事は、第四恩物及び第五恩物の間を繋ぐものであるから、新材料に對しても何の躊躇も無く確信を以て之に着手する事が出来る。しばらく間の形を發見させる様な遊を續けた後には、この木片を以て、容易く色々な構成に組立てる事が出来る。大小兩形の木片が現はれた爲に、その新しい形や量の増した事は一層強められたと共に、之等小さい能力のある人々の爲に廣い場面を開いたわけである。設定の仕事を課する場合には、どこまでも暗示といふ事を離れない様にして行かなければならぬ。この恩物を以ては、フレーベル式で所謂「美麗式」と名付くが如き相稱形は、どんなものでも——子供が好んで自らやる場合その子供の自由であるが——決してこちらから與へる様な事はしてはならぬ。この相稱形を與へる事は、わ

ざと省くのであつて、それは、この恩物の性質の上から見て、組立の目的とする材料であつて、構成的仕事に餘程自然的に適して居るからである。であるから保姆は、限りある時間内の仕事の排列に於て、板並べや輪の如き、相稱形を授けるに適した材料を持たせる時に特に重きをこの方面に置いて、今は之にふれない様にする方が得策だと考へるのである。組全體が合同して、例へば町を建てるといふが如き事をして遊ぶ事は、仕事としては勝れたものとして此の時に始められ、年の終り頃になつて、子供等を二人づゝ又は三人づゝの團體として、時々此の積木を以て、或る構成に組合はせるのである。

はつ眞桑堅にや割らん輪にやせん

芭蕉

幼児保育の疑義

——小學校より見たる幼児の保育——

五 條 義 武

小學校に於ける初學年の實際教育が最近よほど變りつゝあることは大いに注意すべき事實であらう。「家庭の延長としての初學年教育」若くは「幼稚園と連絡したる幼年兒童の取扱」等は即ち在來の教育に對する反省を促して、こゝにやうやく低學年に於ける實際教育をある方面に轉換しようとしてゐるのである。

小學校に入學した當初の兒童はその日から明かに小學校の兒童となつたには相違ないが、昨日まではまた明かに家庭の子供であり、幼稚園の幼児であつた。その間一日にしてすべての事情が全く變化したやうなものゝ、その變化を殊更らしく取立てず、著しい生活の破綻を來さない範圍で、出来るならそのまま極めて自然の推移に家庭から學校へ、又幼稚園から小學校へ連絡せしめやうとするは、生活乃至學習指導上初學年の實際問題として當然考慮されねばならぬ重要事項に屬する。

おもふにこの事は一方に於て子供の生活環境からその性情に應ずる唯一の策であるが、尙他方に於ては無理な強制や威壓を去り、格別な命令や注意を與へることなく、自らの途に自らが發動してやがてその學習を展開せしめる無二の根柢で

ある。一定の學校訓練や學習態度を要求し誘導する前に、須らく子供そのもの、常態をそのまゝ、認容して、そこに自己活動を建設せしめねばならぬ。とかういふ意味から家庭若くは幼稚園との連絡に關しては、主として小學校側に於て十分考究し、さうして刷新し改善すべきものなら、宜しくその方策を講ずべきことは言を要しない。

さりながら又小學校の立場から考へるならば、何れ小學校に入學するといふ既定の事實に省みて、幼児をしてそれに應ぜしめるやう相常考慮を拂つてはしいやうに思はれる。家庭に對してはしばらくおき、幼稚園に就いては一面保育をしてゐる關係上、一層この感が深いのである。

固より幼稚園に於てもこの點には十分顧慮されてゐるやうに思ふ。元來保育には保育本來の目的と使命とがある限り、敢へて小學校入學の準備と視做すことは出来ない。否やがて來るべき學校教育に煩はされぬ獨自の趣旨から、幼児の成育黨陶に當ることが當然の立場であらうが、併し子供の教養として一線につながる關係上、多少前後を見通すことも必要であり、意義あることである。しかも或時期を劃して小學校に送るべき幼児としたら、そこに幾分順應するやうな環境をつくることは極めて大切な措置と思ふ。

それ故に幼稚園に於ける保育本來の精神若くは目的に著しく觸らない範圍に於て、小學校に連絡する途を開き、且有効な基礎を築くために、現在以上にもつと深く考ふべきことがありはしないかと思ふ。たまく、余は今年久しぶりにまた尋常一學年を擔任して、色々の經驗を得たが、その中には多少の疑義も懷き、又大いに啓蒙する所も多かつたが、こゝに氣のつくまゝに二三の問題を提供して識者の批判を仰がうと思ふ。

二

尤も幼稚園の保育に關しては餘り多くの智識をもたない余のことであるから、いふ所全く見當違ひかも知れない。且余

一個の觀察を通じての卑見であるから、一般からは遠いものかも知らない。それ等を一應つきとめて述べるのが正しいことと思ふけれど、今はさうした暇もないので、たゞ私見のまゝ卒直に述べて見たいと思ふ。

まづその一つは幼稚園の保育が實質的に見て多少内容が空虚であり貧弱であるといふ點である。即ち形式陶冶として修練や筋肉運動や見ること話すことには可なり練習されてゐるに拘らず、實質的に收得してゐる内容は稍これに伴はない傾向があるといふことである。かくいへば幼稚園では好意に何ものをも授けてゐないといふかも知れないが、余はそこに多少の疑問がないではない。といふのは形式的修練が相當に目的を達するのに、どうして實質的陶冶を疎外してゐるのだからか。殊に實質的陶冶を通じてゝなくては形式修練は到底十分なることは出来ないと思ふからである。

幼児であつても相當に物に對する好奇心が動き、求知心が湧く、彼等は好んで繪本を見、おもちゃをいぢり、動物を捕へ、繪をかく。さういふ間に目や耳の感官の修練され、手指の筋肉が練磨される。と同時に色々のことを知つたり覺えたりして、内容として收得し蓄積するものがある。然るに形式的によく陶冶されてゐながら、實質的に餘りに無内容だといふのはどういふわけであらうか。

家庭から來た子供の中には入學檢定の成績に見ても極めて幼稚なものもあるが、中には幼稚園の保育を受けたものより遙に實質的に豊富な智識をもつものが尠くない。これは發達の相違に負ふ所もあらうが、一つは知的陶冶が相當に行はれた結果といはねばならない。かういふ子供は親兄弟の餘暇ある度に連れ出され、廣く觀察し見聞して、何ものかを收得するの機會に多く接したためである。さうしてかういふ親達は何等の顧慮もなければ遲疑もない。開けば答へる。のみならず問ふ問はぬに關せず色々話して聞かせてゐるので、旺盛な求知心はますますあほられ、限りなき好奇心はいよくそゝられる。ために比較的多くの智識を收得して實質的に一步を來すのであるが、その一面には多少形式的陶冶が疎かにされてゐる。それは親しく自分の感覺機關に訴へて知得するでなくて、多くは口から耳へ説明されたのだから、いきほひ

その點に缺くる所あるは見やすき道理である。

而してまた數觀念や文字力の調査等の結果に徴すると、この間の消息は一層明かである。家庭から來た子供には全く、れ等の教養を経ないものもあるが、その多くは大抵十以下の數觀念などは明瞭であり、片假名なども大體讀めもし且書けるものもある。是等も一方には強制して授けたといふ事情もあらうが、中には自然の間にいつとはなしに覺えたものもなではない。然るに幼稚園の幼児を見ると、概して是等の點にも劣つてゐるやうである。

もとより計算が出來るとか、假名が讀めないとかいふことは問ふ所でない。しかし子供の自然の域に進むのに敢へて何ものをも授けないとしてすべてを幼児から遠ざけてしまふことは考へねはならぬことと思ふ。故意に教へこむやうなことをしなくとも、ひとりで自然の間に覺える途があるなら、それを塞ぐことは決して策の得たるものではない。どれだけ獨力の力におほえられるか、どこまで理解し得るかを監視しつつ、材料として遊戲的に與へる位は保育の作業に加へられても然るべきことと思ふ。

かういふ點から幼稚園の保育に於て、幼児自らが收得する實質的内容を更に豊富に提供する事は出來まいからしと思ふ直觀的材料などは特に重要なものと思ふが、なほ郊外に遊ぶやうな機會がより多くつくられたらと思ふ。さうして自然の生活から直接收得するものが多く得られたら、幼児の將來に可なり大いなる寄與をすることを疑はない。而してまた一方には繪畫や模型や機械があり、なほ數へる遊具や文字のカードや遊具が備へられて、知らずくのうちその發達に應じて收得するやうになつたら、眞に幼児を個人の立場に解放して、その力に印した修練と育成をはかり得ると思ふ。

三

第二にはのびく育てられるが、強いものがないやうに思はれることである。幼弱なものに對してこれを愛護し、環境

整理してあげないやうに誘導する點からのびくとすんなりした子供の多いことは一見しても解る。しかしどこか餘り大事にされ過ぎた、お坊ちゃん、お嬢さんの臭味が多く。そして内に發する強いものがやゝもすれば影をひそめしるる。子供はもつと腕白に、女の子でも意氣潑刺として底力があつてほしい。

幼稚園から來た子供は喧嘩をしない。なか／＼おとなしい。かういふことも見方によつてはどうかと思ふ。素杆にあるがまゝにのびるものなら、子供の喧嘩口論は常に絶えないのがあたり前である。喧嘩をすればすぐとめる。泣くとだますそれも強ち獎勵するには及ばないが、喧嘩をしても時に知らぬ振りをしてゐることも必要ではなからうか。泣いてもだまるまで待つてゐることも必要ではなからうか。

自分のことは自分でするやうな習慣は家庭から來た者より遙によく出來てゐるやうであるが、その代りこたへる所がない。それ等も内に力を養ふことが缺けてゐるためではなからうかと思はれる。それに色々のことをさせて見ると、案外やらうといふ氣力が乏しい感がある。悪くいつたら氣まゝ、勝手とでもいふべきか、とにかく底にこたへる力が足りない。

氣の向くまゝに遊ばせるを本旨とする保育に對して、一事を遂行し專注せしめるやうな要求は敢へて不合理かも知れない。しかしそこは等しく教育である。やりおほせるまでやらせることも人間を作る上には幼児だといつていつも許してはいけない。何かしようといふ目的活動に立つて幾分意志の陶冶をはかり、徒に次から次と氣を轉ず弊を防ぐこともあつてよくなからうか。是等の點も現在相當に考へてゐるといへば要するに程度の問題であるが、余はどこまでもなさんとする意力を養ひ、最後まで努力する不屈の精神を高潮する點に於て、もつと強く鍛えることを囑望してやまない。子供の心に任せてとはいふものゝ、そろ／＼やらせることに導いて、仕遂げさせることに堅く強く自らを持する方面に、出來ることなら底力を養ひたいと思ふ。

この事は小學校に進んでから著しい影響を與へるのである。今日では最早初學年の取扱に於て、決して注入教授や強制

的學習を強いはしない。可なり自由な態度に半ば遊ばせるやうな間から、漸次その學習を企圖してゐるのであつて、これだけしなくてはならぬと厳しくはいはないが、しかし自らやらうとするその態度を根柢として、その力相應に修練の實をはかるのだから、自分にやらうといふ意志もなく、内に發する力が弱かつたら、殆んど何もしないで終るといふやうな結果となる。子供を大事に親切に取扱ふといつても、内に勃發し奔流するこの力がなかつたら、學習は手のつけやうがない隨つてかういふ點により多く啓かれてゐたら、その子供は最も順調な發達を遂げることが出來ようと思ふ。

四

第三にあけることは餘りにませた傾のあることである。おせつかいが多く、こせくする風もある。即ち一般には人なれて如才のない長所があるが、どうかするといらぬ差出口をしたり、みだりに先に立ちたがる缺點がある。尤もこれは特に目立つ二三の者に著しいのであるが、尙どこか素質で單純で醇朴な風が失はれて、やゝ社交的に軽い調子が見える。

このことはむしろ止むを得ない結果で、幼稚園の生活が齎らした共同生活、社會生活の當然の趨勢といはねばならない多くの友達と交り、色々と交渉をする結果は人ずれもするし、ませても來る。そして共同生活の協調から複雑な心的活動を來せば、幾分素朴な風もなくなり、人前をつくらふ社交的訓練も經るのである。しかしかういふ事は明瞭な事實である以上、豫めこれを矯める策に出ることも必要である。

即ちかういふ人事關係を多少脱却せしめて、餘り交渉を深からしめずに、更に他の方面、自然に印した生活を大いに開くといふことである。人を相手の遊戯から物を相手の遊戯に導き、人事交渉を少くして物は生活を多くするやうにしたら幾分緩和されはしまいか、固より社會生活から受ける多くの利益まで没却するものではないが、人事關係が複雑になり、人事交渉が多ければ多いだけ、より多くの弊害が伴ふ。その意味に於て自然に印した生活への轉向は最もよいことと思ふ

土ほじりや、草や花をいぢることは一番子供の素朴な原始的な生活であつて、家庭の子供、殊に郊外に住む子供が比較的素朴なうちに純まるものを餘り社交的にみだされず保育するのはこのわけからである。

しかし今日の幼稚園の實際は自然に即けといつても事情が許されないもので、どうしても人事交渉が多くなり勝である。随つてその弊も決して尠くないのであるが、もつと持つて生れた生地のままに、卒直に赤裸々にのびることが大切である。單に社交的に調子がよくなめらかに人を遇する位ならよいけれど、うまくやつてのけたり、要領よく立ちまはるやうになつたら、虚偽を助長せしめて、偽善を學ばせることになる。子供はあくまでも純真に朴實にのびさなくてはならない。さういふ上から餘りに人事交渉に觸れしめて、子供不相應な氣の利くものをこしらへることは特に注意を要することがある。終りにもう一ついふ事は子供であつても、もつと大きく活動をしないでならぬといふことである。身體的にも、へともとへになる位うんとあべれることがあつてほしい。小學校へ來ても何となくすることが臆病で規模が小さい。三寸かけるとすぐやめる。少しあついとへこたれる。これは餘り大事をとり過ぎる爲めではなからうか。固より周到な注意をもたなくてはならぬが、いよくやる時には大膽に豪放にどこまでもやることもやう少しあつてよからうと思ふ。

家庭から來た子供はこの點が割合に大膽で、ありつたけを發揮するやうな傾向がある。先生なども何とも思はなければとめたつてかまはないやうなものもある。そこは稍粗暴ではあるが、器が何となく大きく、物におびへない點はたしかにとり得がある。かういふ子供は少しのことにへこむとか尻こみ、るとかいふやうなことはない。何でも臆せずやり出すそれで餘り向ふ見ずに輕卒な振舞をすることはつゝしまねばならぬが、さうかといつてちよこく小出しにするやうな精神の使ひ方と態度も賞むべきことではないと思ふ。

五

以上自分の觀察から氣のつくまゝを述べて來たが、餘りに非難の口吻が多くなつてしまつた。しかしこれ程強く言ふ趣意は毫もないので、唯蜀を得て臚を望む心から一言それに及んだまでである。

若しそれ幼稚園からの幼児に對する長所を挙げやうといふならば、決して尠くはない。既に述べたことも二三あるが、なほものゝ解りのよいこと、注意のまとまること、卒直でぐずぐずしないこと、極めて自由で物にとらはれぬこと、比較的情意が圓滿に發達してゐること等はその重なるものであつて、是等はまさに保育の賜といはねばならぬが、その一々に就いては茲には略する。

なほ是等の觀察は僅か一學期間の短時日によつたのであるから、將來どう變るかは今より逆睹することは出来ない。或は余の考案の誤れるを發見して自ら訂正するやうになることもあらう。余は今後に俟つて兒童の觀察をますます深くし、何等か教育の參考資料たらしめんと所期してゐるのであるが、また幼稚園の保育に就いても幼児の實際成績に徴して一層研究したいと思つてゐる。

かぞへねど今宵の月のけしきにて秋の半を空に知るかな

西 行

お月様

東京女子高等師範學校

堀

七

藏

一、お月様

秋の空を飾るものは何といつてもお月様であります。一年中殆ど空に注意することのない人でも秋の月には感慨無量といふ形でありませう、月は年々歳々出で春の月も冬の月も亦秋の月も變つた所がないと眺める人もありませう。しかし仲秋の明月は詩人でなくとも、亦歌人でなくとも、何が一旬なかるべからずといふ氣持に丈けなるに相違ありませんまい。

二、秋の月

古來、月々に月見ぬ月はなければども月見る月はこの月の月といふ位、秋の月は愛でられてゐるのは一體何故であり

ませうか。秋の氣候が暑からず寒からず、月を眺むるに誠に都合がよいことが有力な理由であります。更に秋の空は漸く澄み渡り所謂明月を眺むる便宜のあることが亦一理由であります。空氣中に塵埃や濕氣が多いときは月の光がさええない。元來月は太陽その他の恒星のやうに自ら發光するものではありません。太陽からの光を反射するので、吾々が地球上で見ると月面が光つて見えるのであります。若し吾々が地球から月に旅行し、月から地球を眺めたときには地球も月のやうに見えませう。尤も満月の光力は太陽の光力に比べると、その六十萬分の一で、到底お話にならない位に弱いが、一等星の光力に比べると九萬位も強いのであります。兎に角月は太陽から受ける光の六分の一を、我が地球に反射するので光つて見えることに注意して下さい

い。

三、新月に三日月

月のない時があると考へる人がありませう。また三日月は月の一月に二回あるやうに思つてゐる方がありませう。しかし月の盈虚に注意すると是等の誤解は直にならなす。月は楕圓の軌道を描いて、わが地球の周圍を運行しながら、地球と共に太陽の周圍を運行してゐます。それで月の日光に照らされた面が正に、地球の夜の側の正面にあるときに満月であります。日光に照らされない暗い半面が、地球の晝の側の正面にあるときは新月であります。丁度電燈に照らされた顔を真正面から見るときが満月に相當し、電燈が後頭を照してゐるとき顔面を見るのが新月に相當するのであります。満月は望月とも稱し、新月を朔月といふことは御承知であります。

新月のときには月は太陽と略同時に東天から出て、又同時に西天に入るものであることは御承知でありますか。旭の東天に昇る勢はよく知つて居り、夕陽西山に没する光景

はよく眺めるが、これと殆ど同じ有様で月が出て月が入るとは、實に嘘のやうな眞であります。新月のときは日中月が出てゐる譯であります。しかし新月から三日後までは月は見えないのでありますが所謂三日月になると、日没後暫の間西天に鎌形、所謂三日月形をなして現はれるのであります。この三日月を一寸圖に表はして御覽なさい。

四、上弦の月と満月

三日月はその後一日く幅が増します。またその入りはだんく後れて來ます。新月後七日目になると、即ち所謂七日の月は午後六時頃南の天に半圓の形をなして輝くのであります。これが上弦の月で、凸面が右方にあつて凹面が左方にあつた三日月が半圓となり、左方の明暗の界が殆ど直線になつてゐます。これは太陽に照らされた月の半面と照らされない半面とを等分に吾々が眺めるときで、上弦の月は夜半西天に入るのであります。更に月は次第に盈ち十日の月十一日の月となり、上弦の月より凡そ七日、新月より凡十四日で、月は完圓となります。これが所謂満月で

あります。藤原道長が、

この世をばわが世とぞ思ふ

望月のかけたることもなしと思へば

といった、満月であります。満月は日没の時、東天に出で日出の時、西天に入るので、丁度太陽と交代する。而して終夜われくを照らすのであります。

五、下弦の月

満月から後は毎日月の出が後れて、十六夜の月も更に十八日の月もだんくおそく東天に現はれ。日出の頃には残月として尙西天に輝いてゐます。光る面の右方が次第にかけて來るが、廿一日の月になると再び半圓となるものであります。尤もこの時は直線の光界は右方にあつて所謂下弦の月となる。下弦の月は丁度夜半東天に現はれ、朝六時頃天中するといつて、天の眞南に昇つてゐるのでありますからその後は日光の威大に征服せられ吾人には影も形も見えないのであります。

下弦から後は半圓は次第にかけて狭くなり、廿四日頃の

お 月 様

月となれば再び三日月形となり、朝方東天にかゝるといふ有様であります。それで朝早く見る東天の三日月は眞の三日月ではない。眞の三日月は夕方西天に見るものでありますから、兩者の區別は判然してゐます。それに東天に見ゆる三日月は眞の三日月と形は似てゐますが、光る部分は反對であります。注意して御覽なさい。

更に月はかけて満月後凡そ十四日で新月となり、全く見えなくなりません。月がその軌道を一周するには二十七日七時四十三分十一秒であるが、新月から新月、又は満月から満月までは二十九日十二時四十四分三秒であります。これは月が地球と共に太陽の周圍を廻轉してゐる爲に、地球上の吾人にに月が地球の周圍を一周しても實際一周したことに見え、更に一周といくらか餘分に進まねばならぬからであります。

六、兎の餅搗

満月のときお月様を見ると兎がお餅をついてゐるやうに見えるといふので、古來玉兎と月を稱し、金鳥に對照した

ものであります。西洋では薪を背負つてゐる人といつてゐますが、月面を望遠鏡で見ると明るい所は凹凸のある所で暗い所は平らな所であります。その明るい所には山があつてその影までよく見えるのであります。月の山は地球のものとは大に異り、一種異様であると申します。平地も風変わりであるらしいが、注意すると是等の形状は多少變化する想であります。兎の餅搗の姿勢が段々變化してゐる譯であります。これは長年月に亘つて觀察せねばよく分りませんが、勿論吾々に向つてゐる月の半面には空氣もなければ、水もなく隨つて生物が居る道理がない。兎が餅をつく譯でもなく、薪を背負ふ人がゐる筈ありません。

あまつゆに汚れて涼し瓜の泥

はせな

たとへばなし

お月様は器量自慢で、誰にでも遇ふ度に、

「お日さん程可哀さうな者はない、年が年中汗水たらして働いて居ても、人が見かへりもしやしない。それに引きかへ、私は時々しか顔を出さないのであれども、顔を出す度に下界の人は夢中になつて、綺麗だ美しいと云つて騒ぎます」と吹聴しました。其の吹聴が餘り度に過ぎるので、人間と星とを除いて其の外の天地萬物は皆んな太陽に加勢する様になつて仕舞ひました。

それだから御覽なさい。太陽が出ると空が第一に綺麗な綺麗な色になります。山には美しい霞がかゝつたり、雪の頂が火の様な色に輝いたり、森の中には影や日向で縋を織り、野は見渡す限り活々となります、そうして太陽が沈む時には、草も木も鳥も獸も、別れを惜んで皆んな黒い喪服を身に纏ひます。

月が出て月に加勢するには、かすかな光の星と、あちこちでかすかに唾を開く水とがある計りです。成る程、人もほめます。

然し太陽は人がほめるほめない位は平氣で居るんですと

ら。

——有島全集より——

此の夏の保育講習

一、東京に於ける文部省保育講習

時——自七月二十五日 至七月三十一日

会場——東京女子高等師範學校

課目及講師

幼兒期の心理

古川竹二

遊戲の論理と實際

土川五郎

奈良に於ける文部省保育講習

時——自七月二十八日 至八月三日

会場——奈良女子高等師範學校

課目及講師

幼稚園教育法

森川正雄

幼稚園時代を中心としたる
兒童心理

本庄精次

遺傳と育兒

桑野久任

園藝

福井稔

幼兒の遊技

内田トハ

幼稚園教育の實地指導

會澤タガエ

三、大阪市保育會講習

時——自七月二十一日 至七月二十七日

会場——大阪市

課目及講師

幼兒教育原論

倉橋惣三

四、大分縣保育會講習

時——自八月九日 至八月十一日

会場——大分市

課目及講師

幼稚園の教育

倉橋惣三

五、福岡幼稚園保育講習

時——八月十二日、十三日

会場——福岡市、

課目及講師

幼兒の教育

倉橋惣三

露 天 保 育

大正十年十一月大阪市に於て、露天保育を開始されてから、此處に三年。今回其の貴き實際の結果を左の如く報告せられました。(記者)

露 夫 保 育 の 實 際

1. — 集合、幼兒等は毎朝集會所に參ります。
2. — 朝會、大體全兒が出揃ひましたならば全會集を致しまして、其日の目的なり、偶發事項を話したり或は幼兒の要求を聞き入れたりなど致しまして賤に重きを置いて居ます。
3. — 出發準備。人員點呼、履物服裝並に携帶品の検査、整列整容、乳母車の用意(保育用具一切載積)水筒、救急案の用意。
4. — 出發(晴天の日)愛染堂境内。此處は全く人里遠く離れたやうな感じのする誠に閑靜な而も廣莊な地で大樹は所々に繁茂して、木々の芽ぐむ頃から、地は一面に綠と化して到る所に雜草が生ひ茂て氣持よく夏の日などは大樹の下で涼しく暮す事が出來ます。そして遊び場所も大變廣うございますから最も好都合でありまして幼兒等は春から夏、夏から秋にかけては専ら草摘みに没頭して居ます。そしてそれで飯事や花屋ごと等をして喜んで遊んで居ます。又冬になりますと此處で奴胤を上げたり追ひ羽根をついたりして盛に遊びます。

四天王寺境内。幸ひ四天王寺境内の一隅には、最も幼兒に適したる滑り臺やブランコ、圓木、砂遊び場等が設備されてゐる

ますから此處へ出かけて來ます時にはいつも、かうした運動具で遊びます。それから此處には鳩や龜が澤山飼はれてゐますから米や豆をやつたり麩を與へたりして遊びます。

天王寺公園。此處には動物園もあれば植物園もあり又は市民博物館等がありまして、幼兒の見聞界を廣める事が出來ます又時々市民博物館内で教育的活動寫眞を見せていただく事もあります。

5.——備考。其日の都合で全體が同一行動を取て遊戯具や其他必要な保育用具を一切乳母車に積んで出掛ける事もありませんし又組本位に別々な方面へ、それぞれ必要な玩具や用具を手にく持ちながら出かける事もあります。

そして時候のよい時には、時折其遊び場所でお辨當を食へさせる事もありますが、然しこれは訓育上大に考へなければならぬ點があると思ひますから、特別の時の他は大抵集會所に歸て食事を致す事にして居ます。

そして雨天の日や、酷暑、嚴寒の日等は集會所内で遊戯唱歌やお話をしたり、其他恩物や色々の玩具等で遊ばせてゐます。

露天保育上の所感（普通幼稚園と比較して）

長所1.——自然の恩恵に浴する事が深い。

日光浴や空氣浴を充分にする事が出來ます。

草花に親み胡蝶や蜻蛉を友として遊ぶ事が出來ます。

小石や砂で充分遊ぶ事が出來ます。

敬神感謝の念を養ふ事が出來ます。

2.——存分活動する事が出來る。

廣々した自由の天地で愉快に面白く楽しく充分活動する事が出来ます。

伸びくとした、しかも充實したる生活をなす事が出来ます、自然身體も丈夫になり殊に健脚になります。

3. — 見聞を廣める機会が多い。

自然界や社會を充分觀察する事が出来ます。

そして現實に對する實觀的興味を養ふ事も出来ます。

4. — 情意的訓練を主とする事が出来る。

遊びに必要なる用具は幼児自らが運びます。

保育に必要なる設備其他一切の準備は幼児と保母とで致します。お掃除の如もき幼児と保母とで致します。

自然協同の精神や相互觀念や自治的訓練を與ふる事が出来ます。のみならず幼児等は非常に忍耐し奮勵し努力して一生懸命に勞働を致します。

各兒の行動實行經驗活動によりまして美しい感情を養ふ事が出来ます。

其上經費が至極僅かで誠に經濟的であります。

短所1. — 設備上から見て。

幼兒の遊び場所には必ず、用場と手洗ひ場と休憩所とがなければなりません、然しかうして日々方々へ遊びに出かけます時には、さうした設備を何處の場所にでも自由に得るといふ事は中々不可能な事であります。故に此點に就まして保育者は一方ならぬ苦心と困離を感じてゐます。

2. — 訓育上から見て。

戸外で食事をさせるといふ事は得て放逸に不作法になり易くあります、だから私方では特別の場合の外は、いつも集會

所へ歸てから致す事にしてゐます。

2. — 都市の上から見て。

毎日幼児を引率して交通頻繁なる市中を歩くと云ふ事は中々心配な事であります。

露天保育一覽

1. — 大正十年の夏鈴木視學が下寺町三丁目の八十軒長家を巡視されました時、大に此の地方に於ける教育の必要を感ぜられまして、こゝに露天保育を試る事になつたのであります（大正十年十一月十五日）

2. — 市が特に露天保育を試みたる理由。

建物は無くとも教育は出来るといふ其試みで、否むしろ教育は自然に歸らなければならぬといふ其の考で、人さへあれば教育は、どこでも出来るものといふ其理由で。

3. — 目的 — 自然を友とする事。

4. — 方針 — 健全なる心身の發育を計ること。情意的訓練をなす事。敬神感謝の念を養ふこと。

5. — 主義 — 生活尊重主義。

6. — 方法 — 晴天の日は戸外に出て親しく自然の恩恵に浴しながら自由に愉快に遊ぶこと。

雨天の時は便宜上集會所内で遊ぶこと。

7. — 用具 — 戸外用。乳母車、ゴザ、水筒、鞆、綱、籐輪、豆籠、フットボール、赤白旗、ラケット、毬褲、手綱、奴
風、紙風船、竹トンボ、ゴム毬、羽子板及はね、飛行機、繪本、飯事、道具、救急藥、糸針、小刀、鋏、草履、製作材料
一切。

室内用。玩具、恩物。

8. — 時間。

自四月 自午前八時。自七月 午前八時。自十月 午前九時。
至六月 至午後二時。至九月 正午。至三月 午後二時。

9. — 組編制 (八十名)

舊兒一ノ組年長二二名——宇野 益美

二ノ組年少二一名——岡 千代

新兒三ノ組年長二〇名——藤岡 たみ

四ノ組年少一七名——松川 ヨネ

戸外へ幼児を連れ出す事故一保母の擔任幼兒數は約二十名程と市の方がら定められて居ます。

10. — 經費 (市支出) 年額約二百圓。

人夫賃約六〇圓 (使丁がありませんから時々人夫木炭代約五〇圓を使ふことがあります)

消耗費約九〇圓。

保育料は徴收してゐません。

保母の俸給は市から支出されます。

小學校に於ける初年教育の標準

フレドリツクジ、ボンサー

生活能力の發達としての教育

教育は、結果としてよりも寧ろ手段として、人間生活の豊富と充實を増進するものである。

學校は生活の豊富と富と生活能力とが絶えず増進する様に、其發達を指導し速進する爲に存在する。そして人類の經驗が蓄積した。其發達増進に資するすべての事を學校メンバーに自由に處理させる。此處に二つの基本的なそして密接な問題がある。即ち一は、身體、精神、活動及社會を通じて發達する處の自然的要素を發育見する事で、他はありのまゝを觀察する事により内容及方法に於て最もよく發達を増進せしむべきものを發見し、それを最もよく使用し得る條件と材料を提供する事である。

初年教育時代に於て、總ての兒童の身體的精神的兩方面の能力は、善なり惡なりに永久に感化され得べき發達状態——一生の中最も危険な——にある。兒童の身體は、精神系統と精神行程が尋常に又機能の方を増す様に發達せしめなければならぬ、のみならず其方向も導かれなければならぬ。この發達の過程は二つに區別する爲に一つを重んじて一を等閑にする誤がある。

兒童の身體及精神活動の複雑な發達と、社會生活の問題、活動及價值、とは共に教育のどの時代に於ても決して等閑に

すべからざるものである。此の兩方面は最も豊富に教育され得るすべての経験の方面である。

發達の二要素

發達に、二要素がある。即ち自己活動、發表活動內的要素、及び外界、環境である、發達は即ちこの二者の相互作用によつて決定されるのである。

爲ようとする衝動は内側から來るが、行爲の内容は外界に依つて決められる、即ち話さうとする衝動は内側から來るが話す言葉又話す形は、聞いた言葉又は形に従つて決められる。子兒は先天的に一つの國語を他のと同様、容易に學び得る彼等はまづあらゆる音を衝動的に發音して見て、其の中から最も耳に多く聞く言語を發達させるのである。製作の衝動は筋肉活動を起し、そこから多くの技巧が發達する。環境は、子供の喜ぶ運動的活動から來る親しみのある多くの技巧を提供する。たとへばピアノを弾いたり、ベースボールをする如き生活活動を積んだ吾々には、總ての経験の形が、個的のものとの環境との組み合わせであるといふ事は容易にわかる事である。たとへば發明といふような事でも、それは內的欲望か或は既習の環境の何れにも満足出來なかつた必要の結果である。精神的社會的生産と價値は、環境に依つて、身體的要素と同様に含まるべきである。初等教育の初期には兒童は、身體的精神的衝動が非常に盛である。兒童の経験の豊富さは、之等の衝動を環境がいかに満足せしむるかによる。最も教育的である爲に、そして發達の過程として、各経験は、單なる繰り返しではなく前進的な、より多くの経験へ行く踏み石の如きでなければならぬ。

社會生活に關連した發達

若し人間の生活が完成されて平靜であつて新しい物や邪魔なものが無いとすれば、教育過程は比較的簡單である。然し

人間生活の本然は、發達の本然である。そして發達の本然は變化する。生活は人間に對して絶えず是正を要求してゐる。人間は絶えず試み、創造し日々々に個的及社會的是正の問題に面接する。

この故に教育は、人間生活の經驗を知らせるのみでなく、教育それ自身が前進する生活經驗の行程でなければならぬ。そして各經驗は新しい要素を持つと同時に多くの既知の要素をも含みなほ民族的に精練されたものでなければならぬ。

故に學校の要目は、望ましい生活經驗に依つて作られるとも言ふべきである。生活と教育とを旅にたとへるならば定つた終點を持たず絶えず進行して居り既知の地點に依つてこれまでの行程を知り、行手には絶えず招く望み多い前途が展開されてゐる様なものである。然しかような旅の行程にあつて我々は必ず未開の土地に來るのであつて我々はそれを整理し全然新しい要素で改造しなければならぬ。

初等教育期に於ける幼兒生活の本然

初等學校の兒童に對する實際的標準を記すには、兒童の衝動と行爲の自然的傾向と環境とをまつ考へなければならぬ。兒童は環境に従つて動き、又それに依つて特殊な行爲を呼び起す。あの四、五才から八才もしくは九才の兒童の主な特長を注目する時我、彼等が思考、感情及動作に於て倦くこと無き活動さを表してゐるのを見る。又兒童は爲ると同様に考へるといふ事に注目されよ、彼等は比較的反省はしませんが經驗から多くの實行的智識を得、又智識として學んだ事を實行し得る可能性を持つてゐる、兒童の、爲ようとするとする意氣又その結果に對する意志は可成強い。生物、殊に人の行爲に就て強い興味を持つ。又好奇心も大層強く、觀察、探検、研究、質問等種々の形になつて表れる。注意は強いが速かに變動する。感管及筋肉は可成動的であるが、あまり細い作用には適要されない。

疲勞、習慣、過度の刺戟は多大な害を來す。

想像は躍如たるもので、屢々氣儘な創作となつて表れる。原因結果の關係も容易く理解し、簡單な説明や證據で表はされる。強い色彩と、大きい音に興味を持ち、小説其他何でも、ピクニック祭禮とか競技とか、常規を破る類の事件に最も興味を持つ。發表の衝動は強く、それは劇、發聲法構成活動研究活動となつて表れる。之等の活動に於て最も重要な要素が一つある。即ち兒童の躍如たる想像作用である、それはあまり見逃されそして等閑にされてゐる。理論としては賞讃されてゐるが實行で認められる事は稀である。學校に於て、兒童がほんの僅しか考へる事が出来ないといふ理由は、彼等の可能力の標準に依つて考へるには、餘僅少の機會しか與へられないからである。彼等は少しも考へる事が出来ないといふ假定してゐるからである。然し兒童は學校以外の具體的な問題や質問に就ては考へ得るのである。彼等が可成り思考を要する會話をいかに智的に話し得るかは我々日常がよく知つてゐる事である。かのゲームや遊戯に於ける兒童の材能、必要に應じて材料を適合させたり物を造つたりする巧みさ、滑稽に對する感受さ等は、すべて思考能力の證據である。現今の兒童は考へる事が出来ないといふ説は、我々がいかに、無意味な形式的な、とりつきばのない様な問題を提出してそれに依つて兒童の思考發表を要求してゐるか、又それが出来ないといつて彼等は考へる事が不可能だと結論してゐるか、といふ事を表してゐるのである。

學校に於ける活動が、若し生活の模範であるならば、思考の機會は眞實に、豊富でそして兒童が出来る丈熱心に携はり得るものである。抽象的方法での思考に先だつて、物の實體や其關係に就ての思考が働く。初等學校時代に於て、兒童をして實生活の活動と生活の興味に與らせないといふ事は、人生問題の大半を成す實生活に關して、思考判斷する機會を奪う事になる。

兒童生活の身體的社會的環境

は、其の日常生活と環境との密接の關係に依て表はされる。此時期の兒童の日常生活を見ると、實に我々の社會生活の總ての状態に——方法としては甚だ初步であるが——携はつてゐる事がわかる。即ち年長者の状態や事柄に就て話し合つてゐるのを聞いて質問を出したり、分解したり、討論したり又劇化したりする。兒童は手の及ぶ限りの範圍に於ける道具を使用し物を造り殆ど社會の總ての活動を、遊びに依つて模倣する。

口笛を吹き、歌ひ、音樂を聞き、自分でも樂器を弾いたり、又ゲームや遊戯を一人で爲たり多勢で一所に爲たり、家庭では手傳ひをする。又自分の周圍の複雑な職業的活動を見、其實際にも携はる。即ちパン屋藥屋文房具屋等で物を買ひ、郵便局にも行けば配達夫も見ると又鍛冶屋とか裁判所、掃除人夫を見る、其他、共用水とか街燈とか、圖書館、のような公立の建物に就ても知つてゐる。そして兒童自身學校に行き教會にも日曜學校にも行く、又時には選舉があるといふ事も知り父が立候補すれば大いに聲援する、病院、看護婦、醫師がいかなるものであるかといふ事も大體は知つて居る。それから自分も家族の一員であつて其周圍には多様な状態の家族生活があるのを見る、又政治的會合の様な社會的集合、集會所とかクラブ教會の組織會合等に就ても何事かを知つてゐる。木や花や鳥、動物を愛し、人間生活の因果とか季節や天候に依る變化の或物を感じたり評價する、又自分の屬する社會の他に別な社會があり、現代の前にも時や民族のある事を承知してゐる。此處に挙げた之等の細目、それは兒童が其の環境へ實行的社會的に接觸するほんの一部にすぎないのである。

私の指摘せんとする處は、初等教育時代の兒童は、直接或は間接に彼の周圍の生活、活動のいづれの状態にも實行的に携つて居るといふ事である。かような事實からして學校の細目は最深の注意を持つて之を與へるならば、全然學校以外に於てでも、眞に興味を持って學び得るものである。然し兒童はかような諸種の活動の、個々の要素などには全然無關心であり、大きな關係等に就ても知らない。世界は兒童にとつては不分な單一な、そして變化して行く經驗の流れである、その中には兒童に關係のある總ての成人の活動と社會問題を含んで居り——現在行はるゝ學課目の如きは表れて居ない——そ

れ等が兒童の、最も大なる環境を構成するのである。かくして兒童は、人生の目的、價值、意味及享樂に漸次多く携つて行くのであつて、其生活經驗からの形や助を要求する。そして學校に於て學習する科目は、之等の生活活動に助けとなるべきものを提供すべきである。

要目内容の根源

身體的、社會的環境の感化と、兒童の發達の方法活動並に興味との二方面を考へる時、我々は、要目は經驗それ自身の要求から、直接に出發しなければならぬといふ事がわかる。兒童をして一層十分に、一層有効に、人生の行程に参加させ又彼等の成長して行く活動を前進せしむるものは何物でも、要目の中にとり入れられるべきである。

かようにして要目は、三重の源泉を持つ事になる。即ち

1. 活動——發達を促す、處の創作的内生的發動的活動力。
2. 獎勵的身體的社會的環境。
3. 人生の目的、價值及方法。

之等のどの要素でも缺いた處の要目は、兒童生活の本然と不調和なそして最も高い人類理想の價值を持たぬものである。

經驗の形式と其發達の爲に學校の捧くべきもの

經驗には主要なる三つの型がある。表情的、印象的、説明的經驗が之である。

表情的經驗は、言語、音樂、工案、或は劇に依つて個性を表すもので、印象的經驗は、見たり聞いたり讀んだりする事に依つて外界から感化を受けるもので、説明的經驗は他の經驗と關連して更により經驗をする爲の計畫や方法へ轉化させる

ものである。之等の經驗は追々擴張され合成されるが、いつれの經驗にあつても、育一つが有勢になるものである。
英語。

言語に於ては經驗の表情的形式と印象的形式の關係が非常に密接で殆ど兩者が一つに考へられる。學校はこの表情の方面に就ては言語發達の爲に、其環境を役立たせなければならぬ。——その状態、活動を注意したり評したり報告する事に依つて——。印象的説明的方面は、よい文學の根源から來るお話、短詩、歌などである。傳説、お伽噺、自然の話詩、滑稽談、武勇談等は、すべて想像を表し、意味、價値の概念を擴大し、語原を増し、表情の精練と自在を發達させる助けになる。人に讀んで聞かせたり話したりする事、お話を劇化する事、讀んだ材料で他の活動を助けたりする事は、印象的、表情的經驗を結びつける。この多種類な内容を注意深く選ぶ時、兒童の鑑識の傾向が、高い趣味へと向けられる。手口の兩方面に於けるあらゆる形式の言語發表の機會は、構成的研究的改造的諸活動に於ても豊富に存在する。たとへば一つの構成に共力して居る時、若し教師が相當に導くならば自由に討議したり、興味について、明確に考へたり發表したりする能力を發達させる事が出来る。かくして子供の、總ての經驗は、言語發表の發達を力づけるものである。

音樂と技藝。

音樂的興味と理解の發達への材料として、よい歌を多くうたつたり、樂器及肉育のよい音を度々聞く機會を與へるべきである。圖案に於ても亦色、形、要素の種々な表現機會を與る事は大切な事である。織物衣服家具、床敷、壁紙其他美術品、に注意したり、之を樂しんだりする事は、藝術興味 of 初步の發達を助ける。音樂と技術に於ける初步の技巧は、創作使用といふ事丈に止てよい。兩者に於けるどの經驗も、湧き出る様な自然的な樂しみでなければならぬ。

構成と研究。 研究しようとする本然的衝動と製作は此時期の兒童の基本的要素である。之等に對しては、材料と道具を準備する事、又それに依つて思ひの儘にするのを許す事に依つて存分にさせる事が出来る、又之等は興味や、表現力

を高い程度に導く路程として使用されてもよい。單に構成する事、其處にも價値はあるが然しそれは筋肉の問題と同等にすぎない。より大なる構成的價値は、巧の上にとまらず、判斷意味選擇の爲に問ひ又答へる爲に、智識を用ふる處のもの、で新しい要求の道を開くものでなければならぬ。總ての興味と活動から新しい興味と活動が発生すべきである。地理、文學、歴史、手工活動によつて、社會生活や職業や他の民族の生活を學ぶといふ事は、意義ある眞實の生活様式を作るのにまづ必要な事である。吾々並に他の人々が其の住居、食物、衣服、什器を、いかにして造つたかといふ事は、現在の多くの問題を喚起し其の中の或部分は研究と構成活動に依つて最も善く表はされる。織る事、陶器を作る事地圖を造る事其他多種の構成と同時に、無形式な直接研究も亦獎勵されなければならぬ。新しい興味、新しい問題、理想、意義等は多く之等直接研究から産み出される。どの構成的問題も考へると同様、爲る事の出来る様に指導されなければならぬ此活動に依つての教育的發達は手で爲る事よりも、心の方面に多く期待される。爲るといふ事は探究的心狀を多く産み出す。

劇活動。

遠足、研究、構成等の身體的活動に加へてまた之等に依つては満足出来ない處の強い身體的活動がある。此處にも亦心は、身體と同様重要なものである。健康によい調子と身體的發達を促す處の、輕快な精神は、心が樂しまなければ身體的活動のみでは確定する事は出来ない。此處に、表情的活動と説明的經驗が結ばれるのである。地理、歴史、文學に於て見る他の民族の生活を生きるといふ事で、彼等の劇や興味は多くの民族遊戯及ゲームに戟刺と内容を齎す。

實際、總ての學校の活動は協同の實行を産み出す。指導者を選ぶ事、指導者に従ふ事、群團で仕事をする事、一般目的を助け責任を分擔する事等の爲に、そして相互活動に依つて才能が漸次發達する。協同とは二人以上の人が、目的と興味と共にする經驗の状態であつて、進行の方法である。協同の實行に伴つて、相互作用、注意、社會研究、社會生活に依つて協同の必要を意識する事は、實社會に於ての其の重要性を明確にする。家族、社會或は現在の生産的生活を學ぶ事に依つ

て各自、各家族、各社會と、他の人、他の家族、他の社會との連關を明らかにするといふ事は最も重要な事である。

印象的説明的經驗

自然環境、環、境の社會活動、地理歴史に依つて知つた人生の状態又、何、何の爲、如何に、何故にといふ様な兒童の好奇心から湧き出る、無数の質問に應答する事に依つて多くの材料が提出される。自然科学、地理、歴史、美術的工業的生產的技術と公共的改造的活動は人間活動と價値に適應し又其材料となる。

機械的技術か用途への技術か

發表的、印象的、説明的活動の進行中、そこには、數へる事、書く事、書く事、讀む事の技術或は過程の必要が漸次起て来る。用途、を離れては之等は無價値である、之等は價値ある活動を持ち來す處の道具として至要なのである。用途が明かに認められ、増進せらるゝならば、之等の問題は單獨な學習としてでなく、紹介の初からして眞に役立つものと成る。勿論、其々の發達の爲に、特殊の教授と實習が不要であるといふのではない。なほ之等の基本的な用途以外に、簡単な道具を取扱ふとか圖を畫くとか其他多種な材料で仕事をする時の、或程度に於ての熟達は必要である。其過程は、すべて其用途としての活動の副産物として發達されるのであつて、初等學校に於ては技巧に對する實行や練習は要求しない。

摘要の内容と活動

極く家庭的な、ふだんに於て我々は兒童の様々な活動を聚集し得る。それらは自然及、社會生活が與へた内容を説明して居り又それに依て兒童が順當に育て行くのである。區分すれば――

- a. 言語或通信。及び述語、讀書、書くこと、作文、劇化、文學の各内容と過程。
- b. 音樂。リズムと旋律の内容、器樂及肉聲の階律の調和及歌書。
- c. 劇。ゲーム及運動。リズム的表情の内容と協同的過程と關係。民族的、歴史的意義と健康との關係。
- d. 技術。色と形の代表と工案、建築家具、衣服什器の適用、と其の彩色と彫刻の名作。
- e. 構成。歴史及日常生活に於ける過程と結果。

j. 研究、質問、注意、試、説明的構成と自然研究人文地理、歴史、産業的技巧の内容。

學校生活の最も初期に於て吾々は之等の活動を各個々の内容材料に依て區別する必要を感じない。限定された準備あるプログラムは言語、文學、技術、構成、劇及ゲームの五大部分に編入される。之等は多くの問題と重複し、その區分は何れのプログラムにもキチンと適合する。興味の四形式に因づく他の群團は、次の様である。

通知。(書くのと話すのと兩形式の)

氣分轉換。(身體的活動、文學、音樂、技術、に依て)

構成。(多種多様の形式に於ける)

研究。(自然及社會生活に關しての)

活動の形式の如何にか、はらず其れに適應した民族經驗と民族活動が存在するものであつて、それらは表現や記述を發達させ又其内容を與へて社會的の仕事にも單獨な仕事にも用ひられるものである。要目の、最上の形式といふのは、之等の活動に一番よく適應する組合せと、正しい方向へと基本的發達を促す處の内容と、を備へることである。

仕事 の 標準

前の分解からして發達の度に、二つのタイプがあるといふ事は明白な事である。即ち一つは、活動の各個に於ける行爲の傾向と力の進歩の度であり、他は、含蓄の度と其内容使用の度である。前者は其獨特の興味、状態、選擇の傾向、個々の活動形式に於ける相互作用に於て測り得られ、後者は獨特の智的要素と種々な活動に用ひる機械的進路と技巧に於て測られる。書く事、讀む事、作文の如き過程に精通する爲には、我々はある限定された測定の標準と方法を持つ。又單に所_レ有してゐる事實の知識の爲に、兒童の仕事の範圍を試みる事も容易な事である。然し、興味、傾向、活動力の發達の方向を測る爲には吾々は少しも限定された標準や方法を有たない。唯我々の爲し得るすべては之等を幾分か一般的、記述的に置くといふ事である。興味に於ける發達の度、方向力を決定する方法と同時に發達の過程と理想の内容の度を見出す方法、とは吾々の大に要求する所である。

記述的標準

之等の標準は、どのプログラムや主題の何物にも依つたのではなく、唯生活に役立つ豊富なそして根本的な活動の大きな集りである。

身體的表現及他の身的活動。身體の健康な、正順な發達、それが學校生活の各學年に於ける身體的活動と健康状態の標準である。此發達は、里量と形に相應した増進、に依り、身的活動の興味と良き嗜好と、神系的の傾向を除外し依て、總の機官の基本的作用に依て證據立てられる。兒童が之等の状態を持つ様にするには、三年の終り頃から相當に清潔の習慣を發展させなければならぬ。即ち毎日齒を磨く事や食物に就ての清潔、ハンカチーフの使ひ方。規則正しい食事、睡眠、其他規則正しい身體的注意の他の形式等。又知識に關して、兒童は彼等の爲てゐる習慣が、何故健康の爲に重大なものであるかといふ簡單な理由を知らなければならぬ。又彼等は道を歩く時或は機械を据え附けた建築の中に居る時、道

具を扱ふ時危険を避ける爲にそして安全を保つ爲に、考へ深くある様に、そして其考を實行する習慣を持たなければならぬ。負傷打傷をした時どうしたらよいか、自分が火傷を受けた時又衣服に火がついた時どうしたらよいかといふ事も知らなければならぬ。かような不意の出來事に對して如何に處すべきかを知らしむるのは、兒童に其取扱の可能な事を意味するのではなく、應急に際し、處置し得る人の所へかけつける事が大切であるといふ事を知識として常に、持たさなければならぬのである。

之等の習慣、状態、及知識は兒童に對する絶えざる注意に依てのみ發達させ得る。どの學年でどの位發達せしむべきかといふ事は決定し難い事である。然し極く最初から、この事柄は力説されなければならない、そして機會ある時にはこの重大な健康の警告を與へ又兒童自身によつても取扱はしむべきである。

身體的遊戯、ゲーム、運動は、人格的愉快さを伴つて同時に身心の鍛練を爲し得る、最も衛生的な善い方法である。劇、或は娛樂的興味を學ぶ事に依て、歴史、文學、地理で學んだ多くの事が活用される、凡ての身體的教育活動は、愉快であつて、同様の事を幾回も要求する様なものでなければならぬ。

言語と文學。各學年及學年に關はらず如何なる時に於ても、言語の標準は、出來る丈自由と自發と明瞭を表現するものであれば何でもよろしい。兒童には變語が非常に多くある。それで教師は、兒童が表現の形に就て助力を求めてゐる様な機會のある毎に表現の質を改める様に努力しなければならぬ。人の話すのを聞いて其の内容が理解出來る様になると、言語表現（言ふ事書く事共に）の主な材料が得られる。よい事を言はふとする事、それは思考の第一である。よい發表又は興味ある事柄を多く讀むといふ事は讀む者の表現の發達を非常に進めるものである。

讀む事に於ての標準は、眞に興味と満足を以て讀んだあらゆるものである。其範圍には、お伽噺、傳説、詩、其他生活興味のあるあらゆる問題に關した一般の多様な報告的材料用も含む。其發達は、讀む事に依つて得た經驗の豊富さと、もつと

讀まふとする欲望の強さにある。善い讀み物に於ての興味と嗜好とが、發達の最も正しい形の證據である。總ての學習は良い讀書の興味と状態を助け得るものであつて又助けなければならぬ。三年の終りには、廣い範圍に於ての讀書興味、良き讀書習慣、良き嗜好等が可成良く確定されるものである。

研究的構成的活動。研究的、構成的活動に於ける發達は、自然界及人類社會に對する興味を増大と、其興味がどれ丈續行し得るかといふ能力の増大とに依つて測定され、其内容は歴史的公共的産業技術、地理及自然科學に於ける主題を作り出す。若し此の方面に於ける興味が増大し、總ての要求が諸問題を産出し、そして其方法が漸次改良され、成形や問題解決に於けるより大なる能力が作らるゝならば、それは正しい發達であると云ふ事が出来る。研究の仕方に依つて、發達が改善されれば、それに依つて單に記憶を用ふるに止らず、重要な知識的材料を得る事が出来る。かゝる考究から兒童自身の生活と經驗を彼等に於てはめれば多くの數の必要や、讀んだり書いたり話したりする發表の必要や機會が起つて來る時には兒童は初めて面接した新しい事柄に就て教示を要求する事がある、然し其意味が教示された後は兒童の實行や練習だ出發するので教示に要した時間は、現今一般に行はるる教示に比しては、ほんの一部分にすぎないものである自然界に就ての熱心なる考究は、自然が人に如何に及すか、又人が自然に如何に及すかといふ點に向けられる。そして、動物や花の世話、鑛山や畑の産物の効用、風水瓦斯電力利用、又氣候や周圍の状態に、いかによく生活を調和させ、衣食住を適應させるかといふ事に就て、人間が如何に自然を、最善の用途へ使つて居るかといふ事を見る。

社會生活の方面では、個々の合力が平安な全體を成すといふ事が大いに注目されなければならない。文明生活の大きな權威は、人格的責任の逃れられない系倫と相互作用と相互扶助である。現代の農業的、生産的、商業的職業的公共的改造的、宗教的社會生活に於ける、協力と勞働の事實と様式とは、兒童が彼等の考求の深さと廣さを増大すればするほど益々明らかになつて來る。第三年の終り頃に、兒童は、人類事件や興味にひかれて、自然界への興味を失つて來る。同様に彼

等は英雄的人物の冒險や發見、又其習慣や創作に對して興味を持つ様に成つて來る。彼等は疑問と考究的な氣持で充實する様になる。彼等は又自分の要求を満し得る獨立した力を持つ様に成つて來る。

技術の表現と鑑賞。技術に於ける發達は、色、形、美に對する興味の度と、質や組立を喜ぶ力とに依つて測られる。之等の發達は、生産物に圖案をしたり、それを選択したりする事に密接な關係を持つ。發達の他の起因は、建築、彫刻、繪畫の名作を理解し樂むといふ事にある。そして之等は鑑賞と興味を養成する。

音樂。音樂に於ける發達は、聞く樂しみに依るものと歌う樂しみに依るものとに分たれる。音樂的表現として、美術や原始的詩に於てのように、極く簡單な表現を作り出す事は、音樂の、技巧と構成の兩方面を獎勵する事に有力なことである。

總ての教育的經驗は充實されなければならぬ。

此の方面に於ける總ての要求は、發達の基礎的狀態であるからして、其經驗は大に獎勵され又満足せしめられなければならない。自然界と人類界とに依て絶えず考究發問を促され獎勵されてゐる兒童のかうした欲求に満ちた狀態を、發展させて行く事は教師の大なる働と動機にまつものである。兒童の生活は、樂しい、元氣のよい前進的な冒險である。其知識は、身體的力や感じの發達の補助者として自由であるべきである。集めたり分けたりする考へ方は生活の性質を、改良して行くのに大いに大切な事である。

學習の主題に關しての發達の標準

學習の主題を、手段として又補助として、——結果として無く——それ自身重要である處の生活を良く發達させると言ふ事が、即ち私が努力して力説し來た所である。人格的社會生活の多くの相互作用に於て、兒童の傾向や力を指導し

て、相互作用の、より高い形式の方へ向はせると云ふ事は、教育に於ける最も大なる問題である。民族が蓄積した大なる富源を知らしめ、又それ等を如何に使用すべきかを教ふる事は、學習の主題を最も基本的に扱はせる。適用さるべき標準といふのは健全な生活の實行である。——仕事の最上の方法と高い目的の實行と理解。改造公共活動、仕事に於ける相互作用の最上方法の實行。健康によい遊び。環境の習慣と状態と最善の技術、音楽、文學。忍耐と正直な心持。正しい生活に於ける經驗の價値を増進せしむる協同的獎勵と同情の状態。かような多くの經驗を成就する事は種々なる行爲の意義又結果を辨別する大きな要素となる。かような傾向や考は兒童期の極くはじめから植えつけられなければならぬ事であつて、決して早すぎるといふ事はない。事實或兒童は學齡期前既に悪い傾向に染み、後から土臺を据え換へてそれをなほして行くといふ事は非常な困難であつた。自治、協同、創造力の習慣、よい働きの習慣、熱心さ、よい爲方、よい欲望は發達する様に、準備されなければならない。兒童の心は理想意味より行動への傾向、考へたり判斷する習慣で満ち〜で居なければならない。此等の標準を細目に分ち、幼稚園と各學年の子供の傾向に應じて分類する事は教師の爲にも、必要な事であるが、それは大きな計畫であるから、狀にあてはめて自分の知識で實行して行かむ。吾々は、此の最も基礎的な、重大な、人格的社會生活に、結果し増大して行く處の、眞の發達を、保つて行かねばならない。

かくして吾人は兒童の生活其自身を十分に認める事と、其の最もものぞましい傾向と力の發達が、青年期、壯年期を貫いてまで發展して行く事とを確言すべきである。目下は現——The Kindergarten and First Grade——を

外苑の雜草

み　ど　り

○ 「四つの葉ばはないかいな」

Kが口おさむのを同じ様な小聲で子供達もまねた。

梅雨には入つてからもう十日近く空は毎日ふりもせず照りもせず、かぶさつた様にくもつてゐた。しかしバラック生活にとつては、雨の日も晴の日もこれ以上に苦しいのであるから、——ことに此處の様に緑の環境を恵まれた處では——時は何處からか爆弾でも落ちて来ればいゝと希ふほど陰鬱になる事はあつても、かうして續く疊つた日がありがたくも思はれた。

「先生、四つの葉ば、はどうするの？」

「煮て喰べるの？」(雲雀の鳴きはじめて時分、バラックの人達は此邊に生えた、なづなを摘んでは食用にした。kも

お晝のお菜に度々托兒所の小母さんに、なづなのお料理をしてもらつて、野の香りが好きになつた程であつた。)

「いゝえ」

「ぢやあ、どうするの？」

「さあ、どうするのかがあてゝごらん」

「しらないや」

「あのね、私のお家に母さんが病氣で、ねてゐるの、それでもしかね、四つの葉ばが今見つかれば、なほるのよ」

「ぢやあ、あたしも探してあげようね」

「あたしも」

「ありがたう」と口の中で云ひながらkの目はちつと草の上におちてゐた。

「あ、あつた〜、も一つ、あ二つ」

「どうれ？」

「ほうらね、一つ二つ三つ四つ、一つ二つ三つ四つ。まあよかつた、あ、うれしい、きつと母さんの病氣がなほる事よ」
Kは子供のようになう云ひながら子供の様に心からよろこんだ。

「まあよかつた。ね先生」

傍に居たA子が程たつてから、尤もらしく云つたのでは思はず笑つた、そして軽いほゝゝみか波紋のように子供達の中に傳はつて行つた。

○

海老茶色の笠のような帽子にカーキ色の服を着たお爺さん、青山外苑バラック五十九棟の間を「チチン〜」と金を鳴らしながら。

「うどんちよば(蕎麥)〜、も一つおまけにちよば〜」と呼んで歩く、おひる前に一度、多方一き度まつて廻つて来る。がお爺さんは大の子供好き托兒所の前に來るとうどの車をわきへ放り出して置いて托兒所の窓の外にある植木鉢の棚に頼杖をつき、溶けさうな顔をして子供の養に見

とれてゐる。遊戯やゲームをしてゐる時だと、きつと終り

まで見てゐて其の間はどこか蕎麥やさんと呼んでもお爺さんの耳にはは入らない。雨の日、晴れた、日曇つた日、にかゝはらずお爺さんの來る刻限は凡そ同じようであつた。

托兒所で未だ時計のなかつた時分、子供達はよく云つた。

「ちよば〜、のお爺さん來たから、もうおならび？」

と、そしてお爺さんは一人〜に、「さよなら」と云ふ子等を見送つてから、しづかに車を引き出して。

「も一つおまけに、ちよば〜」獨特の節まはして、夕やけのバラック村に餘音をひいて行く。

○

昔の青山練兵場、は青草の原で處々に大きな立木があつて暑い時は原を横ぎる人達が五六人づゝ、きつと樹の根に休んでゐた。そして、黒と赤との軍服が點々と廣野のあちこちに動いてゐた。

神宮造營局、繪畫館、競技場、若松やチューリップの林そして「なんじやもんじや」と立札のある大樹の下には柵がめぐらされコツチンコツチン明けの空から入日の頃まで

石工の槌の音が響いて居り、運搬自動車や地ならしの蒸氣機械、石材を運ぶトロツコが絶え間なく動き昨年震災後は五十九棟のバラツクや學校病院、天幕が建ち交つた、これが今の明治神宮外苑——常語には「外苑」と言ふ——である。

昔の練兵場と今の外苑にたゞ一つ變らないものがある。それは五月半ば頃から六日にかけて草原の中に可愛い頭をならべて咲くクロバアの花——子供の言ふ「白れんげ」である。

「れんげの姉さま作るからおべべ、頂戴」

と、言はれるままに色紙を持って前の草原に出ると、かすかに甘い花の香が野の風に送られて來た、とたまらなく懐しい氣持がよせて來た、丁度K目の前に居る子供位の時に、父の好きな眞赤なネルの衣物を着て、ほくろの小母さん(口元に三つほくろがあつたので幼いKはかう呼び慣れてゐた)につれられたは、此處へ白れんげを摘みに來た事を思ひ出したので——。

薪の燃える香、初夏の木の花の香、香に伴た過去を感じ

は、同じ香に觸れる時まさしくと生きて自分の胸に蘇て來る。涙ぐましい氣持である。

子供達がつれて來た姉様を見ると、白いのに交つて、いかにも女の子らしい薄紅色をしたのが、いくつもある。ほくろの小母さん」に伴れられてKが來た頃は、花の白いのは稀れで大抵は、うすとき色をして今のより輪も、もつと大きく背が高かつた。ただ、ほんのり甘いその香りだけは今も昔も同じものであつた。

○

托兒所の小父さんは暇があると紙風船を貼つてゐた。「おぢさん、それふくらましてあげようか」遊びにあきた時、子供や私達がさういふと、「むづかしいよ、出來ますかね」と云ひながら小父さんは持ち方や吹く呼吸をしづかに教へてくれる。が小父さんのいふ通りその呼吸はなかく、むづかしくて、やり損じる方が多かつた。轉がしねだ同様のバラツクの床には身が近づくとつれて小虫が上つて來た。或時何氣なしにお茶碗を出しに行くと、棚の横板に「蟻の森へ一里」蟻の森へ一里」と書いた紙が、一しきり毎に貼り

つけてある。「小父さんこの紙は何？」とたづねると、

「へえ、さうして置かないと蟻が上つて來ますからね」

小父さんの言葉は眞面目であつた。風船貼つて下向いてゐる白い眉が善良そのものの様であつた。

「撫で、やりたい様な氣持ね」私達は後でこんな事を云つた。そして子供の家の留守番を、この小父さんがしてくれるのを大へんうれしいと思つた。

も一人毎日おやつのお菓子を持つて來る菓子屋の小父さんに、

「小父さん此の頃はちつとも小僧さんが來ませんね」と聞いたところ、

「へい、あれがね、あなた此間、ちよいとした事で狐につままれましたね、乗つて行つた自轉車を八百屋にあづけたまゝで夜になつてから、土だらけの顔して歸つて來ました此原はまだ狐がいますから、先生方も夕方などはなるべく早くお歸りになる方がよございます」小父さんの言葉には少しも諛語なけはひは無かつた、私は二十年も前に、やつぱし此の原で、家に泊つて居た臺灣の小父さんが狐につまま

れて一夜中原を歩き廻つて翌朝歸つて來て恐しさうにはなした話を思ひ出した。「早く歸りませうね」と云つたら「その方がよろしうございます」よと心から云つて菓子屋の小父さんは歸つて行つた。

この二人の小父さんの世界、と子供の世界と。私達はせめて、破壊者になるまい。

會 告

七月號にお報せ致しました通り、編輯の都合上八月號は本、九月號と合しまして倍大號として發行致します。どうぞお含み居き願ひます。

お 春

東京女子高等師範學校教授 岡 田 美 津

二、伯母の代理

お春が河崎村の小學校を卒へて、渡瀬の中學校に入つたころに一つ事件が起こつた。それは古川といふ宣教師が、シリアから河崎村に歸つて來た事だつた。村の教會は、婦人達は三月のある水曜日にその人の爲に會を開いた。あいにく風の吹き荒む寒い日で、降りつもつた雪が地に残つてゐるのに、まだその上に降つて來さうな空模様だつた。田中のおみねもおよねも二人ながら風を引いてゐたので、こんな日に外出は出來ないと思つてゐた。しかし、おみねは、會の役員だつたので缺席するのが心苦しくて朝飯の時にも不機嫌でおよねが自分と同時に風を引いたりしなければいゝのになど、言つた末、お春を代りに出すより他に仕方がないといつた。

「唯も行かぬよりは勝しだらう。およね伯母さんに學校の缺課届を書いて御貰ひ。そしてゴム靴を穿いて歸りには教會の方の道から歸つておいで。なんでもその古川といふ人は、うちの御父さん（お前のお祖父さんだよ）と懇意じ、いつかべんうちへ泊つた事もあるんだから、私達が來てゐるかと思つて探かすかも知れない。御前行つて伯母の代理ですつて言つて挨拶をするんだよ。そして行儀よくしなければなりませんよ。祈禱の時にはちやんと頭を下けて、讚美歌はみんな歌つて……大聲で威張つたやうな歌ひ方でなくだよ。それから、みなさんに伯母達がひどく風を引いたのだといつてね。暇

があつたら會が始まらないうらにハンケチで樂器の塵を拂つて置き、それから寄附金でも集めるのだといけないから、二十五錢あすこのマツチ箱から出しておいで。」

お春は悦んで承諾した。お春には、村の傳道會なんかでも面白いので、それに伯母の代理になるといふ事は嬉しくて胸が躍るやうであつた。

その集りは、日曜學校の教室で催された。お春が入つていつた時には、古川牧師は演壇の席に着いてゐるたが會員は十一二人位しか出席してゐなかつた。お春はさすがにきまりが悪く、年のゆかぬのが特別目に立つので、誰が心易い人はないかと見廻はしたところ、鳥飼のおかみさんが正面近くの横の席にゐたので、中央の通路を進んでその傍へ座つた。

「うちの伯母さん二人とも風を引いてゐるんで私を代りによこしたんです。」とお春は小聲で話した。

「壇の上に旦那さんと一所にゐるあれが古川さんの奥さんだよ。ずいぶん日に焦けてるね。人の靈魂を救はうとすると自分の顔の色なんかの事はあきらめなくちやならないらしい。」と鳥飼のおかみさんが小聲で答へた。

古川の奥さんといふ人は、細りした弱々しい人で、苦勞を黙つて我慢してゐるさうな婦人だつた。着古しの黒絹の着物を被て疲れたやうな顔をしてゐるので、お春は、氣の毒な人だと思つてゐた。鳥飼のおかみさんは、また。

「あの人は、それはく貧乏なのだけれど、他が何が贈るとすぐ施こしてしまふのだつて。あの金時計だつて、みんなが御金を集めて買つて上げたのだけれど、あれだつて、野蠻人 やりかねない。たゞね野蠻人は、御太陽さままで時刻を測るから時計はいらぬのさ。」

會は始まつた。まづ祈禱があつて、それから古川師はある讀美歌の文句をいづて、

「どなたか樂器を弾いて下さる方がありませんか。」と出しぬけに言ひ出した。

會衆は互に顔を見合せてゐるばかりで立つ人がなかつた。すると隅の方から、「お春さんお弾きよ」と誰だか無造作に聲をかけた。それは幸兵衛のおかみさんだつた。お春は一の曲なら暗闇でも弾ける程によく知つてゐるので、さつさと出ていつて弾いた。伯母さん達があるないのでお春の氣は樂であつた。

牧師の談話は、例によつて例の如しのもので神の教へが擴まるやうにしたいといふ事、神の道知らずに居る人々に自分で説きすゝめに出かけられない人は、お金を寄附して、その爲に働く人を援けて欲しいといふ事を述べた。が、この牧師は話し上手の熱心な人なので、談話の中へ、異國人の風俗習慣、言語、思想の事を混せて話してきかせ又、自分の家族の日々の生活振りや、忠實な妻君の働きや、シリアの地で生れた子供達の事までも言ひ添へた。

お春は、別天地の姿をのぞかせられて恍惚となつてしまつた。河崎村は消えてしまひ、日曜學校の教室も、鳥飼のおかみさんの赤いシヨールも、腰掛も、讀美歌の本も、掛けてある聖書の句も地圖もこの子の目に入らなくなつて碧い空強い光の星、白いシリア人の願巾、派手な色彩が見えてゐた。古川師の談話にはなかつたが、お春は、お寺だの光塔だの「なつめ椀」だのがあるのだと考へた。そしてシリアの國で生れた子供達はどんなめづらしい御話を知つてゐるのだらうなどと次の歌を弾いてくれといはれるまで空想してゐた。

寄附金の箱がまはつたが銅貨や十錢銀貨がまばらに入つただけなので、之ではならぬと古川師は、

「どなたか主になつて私共の爲に懇談會をして下さるなら、今晚と明日こゝに滞在しやうと思ひます。その場合に、私の妻と子供にシリアの衣裳をつけさせて御目にかけます。それからシリア人の手細工の標本を御覽に入れたり、シリアの子供達を私共が教へる有様を御話したりしたいと思います。四角張らない集りですと、質問や御話が自由に出來て、案外興味をもつ方が出來るものですが……もしどなたか思召があつて一晩泊めて下さるなら、私共は悦んで滞在して、私共の事業についてなほ委しく申上げますが。」

一座黙りがへつてゐた。どの人にも御客を招けない相應の理由があつたので。明き室をもたぬものもあり、食物の貯への十分でないものもあり。病人をかゝへてゐる人、見知らぬ宣教師を泊めるのを不賛成な家族のある人もあつた。古川の妻君はもぢくして黒絹の古衣裳を撫でゐる。お春は「だれも何とも言はないのか知ら」と氣を揉んでゐる。すると鳥飼のおかみが首を伸してお春に囁くには、

「宣教師はいつでもお前さんの伯母さんここで泊つたものだよ。お前さんの祖父さんが生きておいでの頃には決して他家へ泊まらせなかつたからね。」

このおかみは、おみねが四つも明き室があるのに「けち」だから泊めはしまいと皮肉のつもりで言つたのだが、お春は、智恵を貸してくれたのだと思つた。「以前からの慣例なら、自分がかうして代理になつて來てゐるからには、此場合伯母さんだつて私が言出すべきだとお思ひなさるだらう。」すべき事が、したいとおもふ事と一致したのでお春はよろこんで立ち上り、可愛い、聲で、村の子供達には見られない趣のある態度で、

「あの、私の伯母さん達……田中みねと田中よね……が悦んで御泊め申すと思ひます。宣教師の方をお泊めするのが先代からの例でございますから。伯母達からよろしく申上げるやうにと私言ひ付かつて参りました。」

お春の言ひ方がいかにも重々しいものであつたから、もし伯母達がきいたら恐れ呆れ、おのゝいた事だらうが一座の人達には少なからぬ印象を與へた。田中のおみねはどうしてさう急に心が改まつたんだらう。きつと天國へゆく支度をせつせとしてゐるんだ直と人々は内心思つてゐた。

古川師は恭しく頭を下けてその招待に應じた。會が了つてから、お春は、古川の奥さんのとこへ行くと奥さんは、懐かしげに、

「あなたのとこへ泊めて下さるといふので悦んでゐますよ、五時半ごろに上つたら遅すぎるでせうか、今、三時ですがね

これから停車場へいつて荷物を取つて子供達を連れて來なければならぬです。こゝへ泊るかどうだか分らないので、そこへ預けて來たので……」

お春は、御夜食は五時半だからといつて、幸兵衛の御かみさんに誘はれて一所にその馬車にのつた。お春は興奮して顔が上氣し唇が震へてゐるので歸り途は大方無言でゐた。寒い風とおせき小母さん（幸兵衛の家内）の落付いた相手ぶりでお春はやう／＼平常のやうになつて、元氣よく家に入つた。入り口でゴム靴をぬいだりするのがまだる／＼と、マツトを居間へ持ち込んで話をする間中その上に立ちつゝけた。

「お前の靴を暖めて置いたから、話しながら穿いたらよからう。」とおよね伯母さんがいつた。

一三、お祖父さんの孫

お春は話し出した。

「あのね、伯母さん、ごく小人数の會でしたよ。宣教師の人とその奥さんで好い人なの。今夜こゝの家へ泊まつて明日も一日、るんですよ。宜いでせう伯母さん。」

おみねは編物を膝に落とし、眼鏡を外して……取のほせた時のこの人の癖なので……

「先方でこゝへ來ると言つたのかへ。」

「いいえ。」とお春は答へて、「伯母さんに代つて私が招待しなくツちやならなかつたの。でも、あんな面白い御客様が來たら伯母さんもいやぢやないだらうと思つたんです。まあ、こうだつたの……」

「一寸、話はあとにして、何時こゝへ來るんだかそれを先に御きかせ。今ぢきにかへ。」

「まだ二時間は大丈夫來ませぬよ……五時半頃。」

「それぢや話すがいい。一體誰の許しを受けてお前は知りもしない人を一晩泊めるといつたのさ。此家では二十年を御客を招んだ事はないのをお前だつて知つてゐるのに。これから後の二十年だつて御客を招びはしないよ……とにかく私がこの家の主人であるうちは。」

およねは、

「まあ話をよくきくもしないで、叱つたていけないでせう。私達が今日の會に出たら、そんな事になりはしないかと私始めから思つてゐました……古川さんはうちの父さんと心易かつたのだから。」

お春は談をつめて、

「少人數の集りでしたよ。伯母さんの言傳をみなさんにしたら、それは残念だといつてゐらつしやいました。會長が缺席なので、松田の奥さんが代つて會長の椅子に着いたんですけれど、御氣の毒だわ、ねあの肥つた身體からだに椅子が小さすぎで。古川さんの御話は神様を知らないシリアの人の事で、面白かつたの。そして讚美歌も、まく行つたの。それから寄附金の箱がまはつて來た時に見たら四十錢位入つてたらしかつたんです。それつばかりではシリアの赤ん坊一人だつて救へませんね。それから古川さんが、どなたか懇談會を開いて下されば今晚泊つて明日此河崎で集りをして奥さんにシリアの服装をさせたり外國の奇麗な品物を見せたりすると仰つたのです。でも、いくら待つても待つても誰たれれも何とも言はないで、私も困つてしまつて、どうしようかと思つたの。したら、古川さんがまた同じ事を繰返して言つて、河崎に一晩泊りたい譯を御話しなすつたの。それが自分の義務だと考へていらつしやるらしいのがよく分るんですよ。その時ね、鳥飼の小母さんが小聲で私に、お前さんのお祖父さんが生きてお出の頃は、宣教師は田中の家で泊つたもので、他所へなど泊らせなかつたといふの。私伯母さんが御客をなさらなくなつたのを知らなかつたんですよ。だつて私が此村へ來てから旅から歸つた牧師さんなんか一人も來た事ないんですもの。それだもんだから、私、古川さんを御招きしければわるいの

かと思つてね。伯母さんはお自分で招待なさる事が出来ないし、私に代理をするやうにと仰つたんだから。」

「お前どんな風にしたのさ……皆が歸りかけた時に出ていつて名告たのかへ。」

「いゝえ。會の最中に私立つて言つたの。あんまり誰も何とも言はないので、古川さんが氣を悪くしかけなすつたので。

私かう言つたの（私の伯母達……田中みねと田中よね……は悦んで御泊め申します。先代の時からの例になつてゐますから。伯母達からよろしく申し上げるやうにと申付かつて來ました）とそれから私が席に着くと、古川さんがうちのお祖父さんの爲に御祈りをなすつてお祖父さんの精神がその子孫に傳はつてゐるのを感じするツて仰つたの。」

之をきいて田中おみねの心は動いた。一體この女の魂の門は永年閉め切りになつてゐた。一べんに閉まつたわけではなく段々々に當人もよく知らぬ間に閉まつたのであつた。だからお春がありつたけの智慧を振つて、幾日々々もかゝつて策略をしたつて入場謝絶の伯母の心に入つてゆく事は出来なかつたらうが、今は、伯母も知らずお春も心付かぬまに、魂の門がゴチ／＼に錆ついた蝶番てつぱんに沿ふてギユウと開いて「奸機」といふ風に押され／＼て次第に廣く明くやうになつたのだ。おみねは自分の幼い時の事を思ひ出し信心深い尊い父の生活を回想した。「あの頃の田中家は他に立てられ崇められたものであつたが、今日のお春は田中功藏の孫娘として恥づかしくない振舞をしてくれた。して見るとこの兒は萬更近藤家の血ばかりでもないらしい。」と考へて心が和らぎ機嫌がよくなつた。もつとも此女のことだから心の悦びを素振すまげに出してもせず、またこんどの招待は先例になりさうだとの感じを他にもたせもしなかつた。おみねは、

「分つたよ……お前も仕方がなくてそう言つたのだろ。招待の文句は、お前、上手に言つたね。私もおよね伯母さんもこんなに風を引いてゐないといふんだが、しかし家が清潔せいせつで不要の室でもよく片付いてゐて、食物もたつぷり煮焼してある御蔭で、いざといふ時に驚く事もないし、人に誹くされることもない。今日の集まりに來た人の中で、古川さん達を造作もなく御馳走の出来る人達が五六人は居たのにさ、みんな「けち」で不精だからいけない。御客さんは、何故お前と一所に

來なかつたのだへ。」

「停車場へ荷物と子供を取りに行つたんです。」

「え、子供が居るの。」とおみねは唸いた。

「そうなの。シリアの空の下で生れたんですって。」

「やれまあ、幾人ゐるのさ。」

「つひ尋きませんでしたよ。私二つ室を用意しておきませう。それで足りなかつたら、餘つた子を私の床に入れてやるわ。」とお春は内心そうだといひと思ひながら「伯母さん達は半病人だから、こんどだけ御願ひ！ 私に御客さんの支度をさせて下さいな。伯母さんて呼んだら二階へ見に来て頂戴。ね、いゝでせう。」

おみねは溢々、

「そうしようかね。私や、およねの傍で少し横になつて御夜食の支度をする時まで休んで養生をしよう。今三時半だね……五時になつたらすぐ起こしておくくれ。臺所に火は起こしてある。私や、何ていふ事もなく豆を煮ておいたが丁度間に合ふね。お春二階の南の室を二つ支度をしてお置き。」

お春は、生れて始めて思ひ通りにする事を許されたので、旋風のやうに二階に驅け上つた。この家はどの室も清潔此上なしなのだから、お春は窓の日除けを押し上げて床に簾をかけ、椅子や寢臺をはたく丈であつた。伯母達の耳にはお春が走りまはつて枕をドン／＼脹らしたり、タオルをバタ／＼振つたり、洗面器をガチャ／＼言はせたり澄んだ聲で歌を唱つたりしてゐるのが聞こえてゐる。

お春は、大分間に合ふやうな子になつて居た。自分に出来るやうな仕事は、すばしこくしてしまふので、五時頃、伯母達に檢分してくれと聲をかけた時には、あつといはせる程の事をしてあつた。手拭かけには新しいタオルが掛けてあり、

寢臺は敷一つないやうに奇麗になつて居り、水差しには水が一杯い入れてあり、石鹼もマツチも揃へてあつた。新聞紙と焚付けと薪が箱に入れてあつて、大きな薪が暖爐ストーブにゆるやかに燃えてゐた。

「熱い國から来た人達だから、この室を暖めて冷氣ヒュームを去つた方がいゝと思つて。」とお春は説明し「あ、それで思ひ出したお客が来ないうちに地理の本でシリヲを見て置かなくては。」

不都合の個所がないので伯母達は階下へ着物を改めに降りていつた。客間の前を通ると中で火がバチ／＼燃えてゐる音がするので覗いて見ると窓の目除が押上げてあつて表座敷の暖爐にも裏座敷の爐にも赤々と火が焚いてあつた。お春のランプが……アラデンさんの贈物だが……上が大理石になつて卓の上に据えてあつて、桃色の傘から漏れる光りが無趣味な陰氣なこの室を居心地の宜さうな、地ひとと親しくなれさうな室に變へて居た。おみねは、二階へと聲をかけて、

「お春や、お前御客間も使ふんだと思つたのかい。」

お春は髪を結びながら階段たざんの踊場に出て來て、

「感謝祭やクリスマスクリスマスの時に使つたでせう。今日のはそれ程の場合だと思ふんです。私ね、爐棚の上にあつた蠟細工の造花を熔けないやうに他へ移してね、只殻だの珊瑚だの緑色の剝製の鳥だのを棚の上にかけてしまつたの……子供達が玩具にしたがらないやうに。三池の小父さんが何か用で古川さんに逢ひに來るんですよ。それに幸兵衛さんもあそこの小母さんも來るかも知れないの。伯母さん、地下室へいらつしやらなくてもよいわ、私今すぐ行きますから。」

おみねとおよねは顔を見合せた。おみねは、

「まあ、何ていふ子だらう！ 氣が向くとやるにはやるね。」

五時十五分前に何もかも用意が出来た。近所の人遠くの煉瓦家の見える家々の人達は死にさうに好奇心に咬られた。客間の日除が外してあつて、二階の寢室も目除がとれて！ 見る眼に偽がなくなれば火が家中の室に焚いてあるらしい！ 集ま

りに出席した一婦人が御せつかいにも一二軒の家を訪れて、田中の家のざわめきの理由を説明しなかつたらあやまりの不思議にこの晩眠れなかつた連中が多かつた事だらう。

宣教師の一行は、時間通りに着いた。子供は二人だけであつた。あとの子供は旅費を節約するために途中に預けてあるのだつた。およねが御容を二階に案内すると、おみねは食事の支度をした。お春は、早速二人の女の兒を連れて行つて、外套を脱がせ、頭髮を撫じつけてやり、それから襦袢所へ連れて、来て豆の匂ひを嗅がせてやつた。

夜食には、食物が豊かだつた。それに子供達が居たので四角ばつた窮屈の感じがなかつた。およねが茶の間のあと片付をし、おみねが客間で相手をしてゐると、お春と古川の子供は御皿を洗つて臺所で大騒ぎをして、たいした失策ではないが前からひひの入つてゐる茶碗と皿を破はし、銀の匙をごみの中へ捨て「流し」に茶がらを流しこんだりした。お春はかうした罪跡を體よく始末して子供を連れて客間に來て見ると、幸兵衛夫婦と三池といふ人とが訪ねて來てゐた。

非常に愉快な集りだつた。時々話話がシリア人教化の事から外れていつたが、古川師は珍らしい美しい不思議な事を澤山語りきかせた。子供二人は合唱をし、お春も古川の妻君に勧められてガタ／＼ピアノに合せて、勢よく一曲歌つてきかせた。

八時になつた時、お春は、おみねに棕櫚葉の團扇を渡した。ランプの火光がその眼に障らぬためだと言ひながら、實はその蔭で「御菓子を出しては如何でせう」と小聲で尋ねるためたくらみだつた。おみねも、ヒソ／＼聲で、

「その方がいゝだらうかね。」と言つた。

「金子のうちではいつでもさうしますよ。」

「そんならそうおし。どこにあるかお前知つてるだらう。」

お春はそつと戸口の方へ行くと、古川の子供は五分でもお春から離れては居られぬといふ風にあとを追つた。やがて三

人で戻つて来た……子供は、ハートやダイアやまん丸の御煎餅に砂糖のかゝつたのが入つた皿を持って。この煎餅はおよねが専門の菓子なのであつた。お春は六個のコツプに「たんぱく酒」を注いでそれを盆にのせて運んで来た。かうした御馳走を一同が行儀よく食べてしまふとお春は時計を視て子供達の中から立ち上つて、元氣よく言つた。

「さ、ちい宣教師さん達は、寝る時間ですよ。」

みんな笑ひ出した。……とりわけ大宣教師が。子供達は大人達に挨拶をしてお春と一所に客間を出た。

お春が行つてしまふと古川師は、

「あなたの姪御さんは、すいぶん珍しい御子さんですな。」と言つた。

「この頃は可なり氣が利いて來ましたが、どうも不注意でして、それに元氣がありすぎて困ります。」とおみねが答へた。

「いや一番困ることは、活氣がありすぎるのでなく無さすぎる事です。」

「あの聲、と人を惹付ける力、それからあの辯舌ですもの立派な宣教師になれますよ。」と古川の妻君が言つた。

「さあ、宣教師によいか、異教者に適いかといへば異教者の方があの子に似合ふでせうよ。」とおみねは無愛想にいつてのけた。

古川の妻君が呆れたやうな顔をしたので、およねは大急ぎで、

「姉は、子供を賞めるのはよくないと思つてるのでございますよ。」と口を出した。

談話が面倒になりさうなので、幸兵衛の御かみさんは、河崎村からシリアへ行くには幾度乗り換へがありますかと訊き出した。自分でも折に適つた質問だとは思はなかつたが、話題を變へさせる効能はあつた。

三池といふ人がおみねに對つて、

「おみねさん、お春さんを見ると、わしは思ひだす人があるがね。」

「誰だか推して見やうか。」

「ちやお前さまも気が付いてるな。お春さんは親父さん、そつくりだから御腹ン中までもさうかと實は考へてたが、さうでないよ。田中功藏さんに似てゐるんだ。」

「それや、どうしてなのさ。」とおみねは驚き切つて尋ねた。

「先刻ね、集りの時にあの子が立ち上がつて御泊め申すと言つた時にそう思つたんだ。不思議な事にや、功藏さんがよく掛けなすツた椅子にお春さん座つてたんだ。それ功藏さんが立つて何か言ひなざる時に、頤おごをすこし上うへ向けて、頭を心もち、そらせなすツたらう。あの通りにお春さんがやつたんだ。それに氣が付いたのはわし一人ぢやありませんよ。」

訪問者は九時前に歸り去り九時にはみんな床に就いた。

………

お春は翌朝六時前に目が覺めた……用事が澤山あると思ふと氣になつて眠つてゐられなかつたのである、窓のとこへ行つて外を見ると、まだ暗くて、その日も風の騒がしく吹き荒れる日だつた。

「およね伯母さんは、六時半に起きて七時半にお飯にすると言つてらしつたが、伯母さん達は二人とも風邪で氣分がわるいんだわしておみね伯母さんはお客が大勢ゐるんで、氣を揉んでらツしやるだらう。私そつと階下したへ行つて御飯の支度をしかけて、落かせてやらう。」

お春は丹前を引かけて、そつと昇降禁止の表階段を降りて臺所へ行き、戸をびつちやり閉めて、福音が伯母達にきこえないやうにし、よく知つてゐる朝の用事をやり出した。三十分後には自分の室に戻つて着物を着換へ、それから子供達を起こさうとしてゐた。

およねは、前夜はおみねよりも容體が好かつたのに、夜の中に悪くなつて、今朝はとても床を離れることが出来さう

もなかつた。おみねは身じまひをしながち、のべつに口小言をいつてゐた。自分のうけた昨夜からの迷惑今日一日我慢しなければならぬ迷惑を誰のせいだ、彼れのせいだと當り散らして、「一體古川家の人をシリアに派遣した傳道會が不都合だ事の不信者を救ひに異國へ行く人は自國にゐておのれを救ふべきで、そろ／＼子供を引き連れて世界中を遊びまはつて頼みもしない人の宅へ押しかけてくるもンぢやない」ことのこと罵つてゐた。

およねは、頭痛に悩みながら、姉が一人では困るだらうと床の中で案じ煩はつてゐた。

おみねは風に當らぬやうにと、シヨールを頭から被ぶつて、ツン／＼した態度で茶の間を通りぬけて臺所へと行つた。火を起こして置いてからお春を呼び起こして用を言ひ付け、そのひまに伯母の代りに傳道會へ出席する時の心得を言つてきかせやうと思つてゐたのであつた。彼女は、戸を開けてさて、茫然と見渡した……間ちがへて他家の臺所へ入つたぢやないかと思つたのである。窓の日除は上にのけられ、竈には火がドン／＼燃えてゐた。藥罐は音を立て、盛に湯氣を噴いてゐて、その口の邊に「御早う春子」とかいた紙片が挟んであつた。コーヒー瓶は火傷しさうに熱くなつてゐてコーヒーは分量が計つて傍に置いてあつた。馬鈴薯とコンドビーフは盆の上に載せてあつて「御機嫌よう春子」といふ紙片が肉切りナイフに突刺してあつた。パンの塊も出てゐるし焼パンの串も出てゐるし、ドゥナツでも出てゐるし牛乳も抄すつてありバタも取出してあつた。

おみねは頭からシヨールを除つて、ありあふ椅子にドカリり腰を下ろして、小聲で、

「あの子にはかなはない！ 事はれない田中の血統すけだ！」

此日は誰もかれも立派にやつてのけた。およねまで病氣をわるくしてみんなの興を殺ぐやうの事をしないで氣を利かして快くなつてしまつた。

古川家の人達は名残惜しげに別れ去つた。ちい宣教師達は、泣きながらお春にかはらぬ友情を誓つて去つた。お春は、

朝食の前に作つて置いた歌を錢別にと子供達にやつた。

これで田中おみねが生れ代つたやうな人間になれば結構なのだが、實際そうはいかなかつた。二十何年とかいつて歪み捻じた樹がまたく間に眞直になるわけはなかつた。もつとも心の變化は眼に見えぬ程ながら起こりつゝあつたのは確實で、お春に對しておみねはよほど扱ひをゆるやかにし、惡意に解釋する事をつゝし、終局には善良な娘になるだらうと望みをかけるようになつた。これはお春があゝの輕侮すべき近藤家から身體も精神もうけ繼いだのでなく、田中の方からも受繼いでゐるものがあるといふことが急に分つたからであつた。なんでも、お春のよい點は田中の血から來たものと信じ、おみねは誇りを感じた……丁度腕利の技工が「ものになりさうもない」材料を使つて美事の作品を製り出した時の得意さのやうなものであつた。しかし此女は最後……身體の力が弱つて抑制が十分出來なくなつた……まで一度だつて、その誇りを見せた事もないし可愛いゝとの表現をした事もなかつたのである。

編輯だより

九月。秋の聲に先だつ恐怖と凄惨の思ひ出、それは今年の、此地の、此雜誌の、私には止なを得ない。大正十二年九月一日の天と人との争闘は、人に取てあまりに不意打の弱味が多かつた、然し一めぐりの春夏は不屈の力と永遠の成長にみちみちた。

黒く焼けた街路樹からは美しい若葉がもえ、トタン屋根のバラツクからは、力強い産聲が聞こえて、健かな嬰兒は日々を生ひ立ち、思はぬ樹影に楽しい子等の集りが榮えて行く。

生成は焼野の面に、あからさまにそして力強い。目くるめく日輪の光が遠ざかつて、颯端の柳の影には更に涼風が生れた。

近づく火星を打ちあふぐ深碧の空は今更に美しく、今更に大きい、汗みどろの労働者は夜半の冷氣に熟睡した、高い秋の日光は八月のそれよりも更に輝やかしい、一人／＼の前にそして我等の前に、秋が来る。秋の生命をそへらして我等の足は更に踰る。

我等の歩み、我が歩み、更によき十月へ。(編輯子)

御注意	料	告	表		定	
			紙	裏	冊	冊
△(外國行郵税は一部十二錢の割にて御拂込下さい) △本誌購讀御希望の方は定價表により振替貯金で御送金下さい(東京四六書堂書番教文書院宛) △前金切れの節は帯紙に「前金切」と致します。 △郵券送金の節は一割増で一錢切手に願ひます。 △本誌の一切は教文書院宛御照會下さい。	普通面一頁	金四拾五圓	同	一冊	金參拾五錢	金貳錢
	表紙前付	金七拾圓	同	六冊(前金)	金貳圓拾錢	不
	表紙裏付	金七拾圓	同	十二冊(前金)	金四圓貳拾錢	不

大正十三年七月二十八日納本
大正十三年八月一日發行 第二第十四卷函號

無 斷
轉 載

編輯者 倉 橋 惣 三
 發行者 東京市下谷區上根岸八十八番地 越 元 新 吉
 印刷者 東京市小石川區戸崎町七十三番地 沖 田 瀧 次 郎
 印刷所 教文書院印刷部

發行所 東京上野公園寛永寺坂下(上根岸八十八)

電話下谷三〇四七番・一九五一番
振替東京四六一一一番

理學博士 山口銳之助先生
文學博士 藤岡勝二先生

監修 教文書院編輯部編纂

カーレント學生參考書

最新正送
ボイ各料
トン各冊
ケ活金各
ツ字卅各
ト探五四
型用錢錢

現代學生知識の泉源!! 豫習復習受験の要書!!

近時諸種の學生參考書が續々と出版されるが、不備不正確なものも多く、學生諸君をして其選擇に迷はしめるは吾人の最も遺憾とする所である。吾がカーレント參考書は特に是等の點に着眼して前條のモットーに基き、理學博士山口銳之助、文學博士藤岡勝二兩先生監修の下に、各々専門家を分擔し銳意完成したる模範的良參考書にして、豫習、復習、受験に必要缺くべからざるものである。

學生の良師となれ
簡にして要を盡せ
確實にして權威あれ
學習に興味あらしめよ

これが本書編纂の
モットーである。

西	日	代	幾	化	物	外	日
洋	本	本	何	學	理	國	本
史	史	數	學	學	學	地	地
上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下
二冊	二冊	二冊	二冊	二冊	二冊	二冊	二冊
生	植	動	地	英	國	東	算
理	物	物	理	文	史	洋	術
衛	物	物	概	解	釋	史	術
生	學	學	論	法	法	史	術
一冊	一冊	一冊	一冊	一冊	一冊	一冊	一冊

發行所

東京上野寛永寺坂下
(上根岸八十八)

教文書院

(振替東京四六壹壹番
電話下谷三〇四七番)

東京女子高等師範學校
保姆兼教諭

坂内みつ子先生著

子供の遊ばせ方

四六判クロス製・ポイント活字・正價金一圓八十錢・書留送料十三錢

訂正第八版出來

子供を遊ばせ
るところは

中々難しいが又……で……る。

半歳後の今日賣行きの持續するのは内容の良い結果と信じます。今回改版訂正の上第八版を發行致しました、學校でも家庭でも備ふべき良書であります。

次 目

- 子供を遊ばせるといふ意義
- 子供を遊ばせるに大切な條件
- 子供の好む遊びの種類
- 子供の好む玩具の種類
- 玩具を選定する標準
- 子供を遊ばせる方法
- 室内遊び
- 團體遊び
- 個人的遊び
- 室外遊び

以下
數十項

發行所

東京上野公園
寛永寺坂下

教 文 書 院

電話下谷三〇四七・一九五一番
振替東京四六一二二番

第二十四卷第五號(每月一回一日發行)

大正十三年八月廿八日印刷
大正十三年九月二日發行

本號ニ限リ金七十錢

院書文教